SKY-LINE

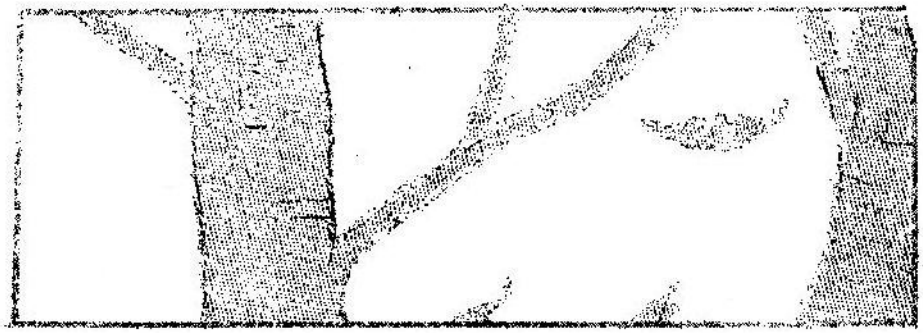
Vol. 2 No. 2

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部

SKY-
-LINE

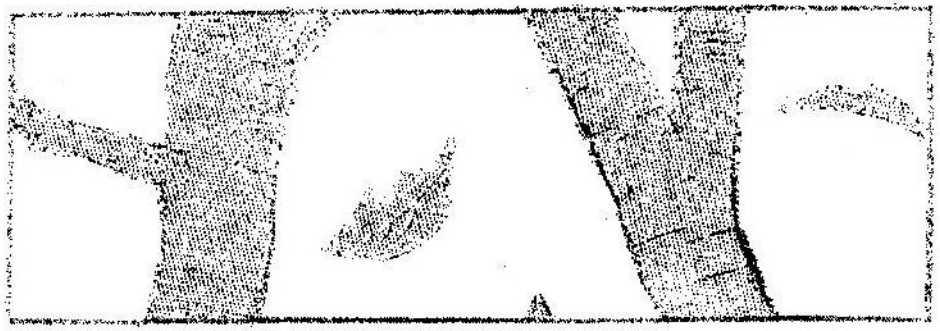
V02, N02

横浜国大ワンダーフォーゲル部



目次

世の中に山ほど良いものはない……柴田晴彦……1
続ワンゲルは如何にあるべきか……嘉納秀明……3
（特集）夏期合宿及びサマーキャンプ報告……6
夏期合宿について　涸沢
先発隊　槍ケ岳
涸沢　北アルプス漫歩
槍ケ岳　サマーキャンプ献立表
上高地散策記　サマーキャンプ反省
合宿献立表　食当悲歌
合宿反省　記録
大滝、長塀山　論加人員
二年強化合宿……36
新入生歓迎登山……白井信行……37
伊豆一周ワンダリング……森山茂……39



木曽路……山田栄子……42
（特集）尾瀬……47
お国自慢（岩国の巻）……米屋勝利……55
着物を脱げというのかい……佐藤文雄……59
裏銀座縦走……松本正雄……62
屋久島……藤林徹……68
秘めごと……A生……69
表銀座縦走……吉村元孝……70
奥日光……平林茂……74
美が原の思い出……米屋勝利……79
丹沢登山……一年……83
八幡平……二年……88
（特集）佐渡……94
編集後記……107
表紙……嘉納秀明

世の中に山ほどいいものはない

柴田晴彦

なにしろ来年は還暦を迎える年令だから山登りと言うより山歩きといつた方が適当かも知れないが、この年齢になつても山が忘れられず色々苦労して適当な機会を作つては四季を通じて歩き廻つている。御苦労様と言えば誠に御苦労様であるが、「世の中に山ほどいゝものはない」と信じている。

二十才頃から山が好きになり大学を卒業して鉄道の技術研究所に勤めるようになつてからは、足代が只と言うせいもあつて随分あちこちの山々を登りまくつて来た。勿論その頃はそう無暗に休暇がとれるわけでもないから、せいぜい一年間に五、六回と言つた程度でありこの頃のように四十日以上も山に行くと言うわけにはいかなかつた。

「一人で山に行つて何が面白いのか」とよく人に問われるが、もう年齢が年齢だから若い人と一緒では人にも迷惑をかけるし自分もつらいから、この頃は大低一人歩きに決めている。勿論遭難などしたくないから計画は人一倍慎重にやる。目的の山を決めてから地図と案内書を持ち出して綿密なプランをあれこれと思いめぐらす時は全く以て楽しみである。

今年も夏山のシーズンは終つてしまつたが、アイゼンとピッケルによる雪氷技術を要する冬山は到底単行では思いも及ばないからあきらめているが、真冬でも一〇〇〇米級の山ならいくらでも行きたい山はある。すつかり葉を落した冬木立のこうした山々を一人静かに歩き廻るのも三〇〇〇米級の夏山と違つた楽しさがある。上手とは言えないが写真を撮つたり独りよがりではあるが和歌を作つたり、そして時にはまた陽の当る南向きの斜面でぼんやり人生を考えるのも悪くはない。

「その年齢になつて遭難でもしたらみつともないからもういい加減に山登りは止めて下さい」と言う老妻の忠告はあるが、山登り、いや山歩きだけは一生止めないと心に誓つている。

「世の中に山ほどいゝものはない」からである。

続 ワンゲルは如何にあるべきか

嘉納秀明

前回は我が部の活動全般に汎つて総括的に述べたに止つたので、今回は限られた紙数ではあるが、部の性格問題について、考えを述べてみたい。ワンゲルがその性格を問題とするのはいはゞ宿命的とも云えるのであつて我々は却つて常に自己の位置を問い続けると云う意識を持つてこそ真なるワンゲルたり得るであろうから、この文を今後更に発展した形での討論への埋草として供したいと思う。

ワンゲルは現在、その精神的中心を失つている。山岳部とハイキングクラブの間にあつて、最近の登山、旅行ブームに支えられている様な状態の中で、山岳部の二軍的存在に従属せず、安易な同好会に堕することがないために、我々は如何なる領域に於て最も有意義な存在たるかを明確にしなければならない。それにはまずワンゲル活動がもと行動的文明批評として始まつたものであり、この態度を今でも受け継いでいるのだとはつきり確認する必要がある。従つてワンゲルはスポーツであると共に文芸精神をもつと云う二面性が却つて特徴となつて来るのであり、かゝるが故に、ワンゲルの個性が存在すると云へるのであるが、それが実際にはつきり認められ、行動にも生かされていると云うのは、他大学の例まで含めて考えても少ない。それはワンゲルを規定するものが型にはまつた抽象的な合言葉ですまされてしまい、それに敢えて具体的解釈を加えず、従つて一応の行動の規準さへはつきりしたものがない為であると私は考へる。私は従つて、ワンゲルに主体的な行動を与へるためには、ワンゲルの特徴

を二三行の名文句から、具体的な幾つかの事項に置き換え、部員として為すべき事はこれこれであり、部として年間行うべき事は少くともしかしかであると規定するべきだと提案する。しかしかゝる規定は、ワンゲル本来の自由で拡大的な活動を防げる憂がなくもないが それは慎し合う事に依つて解決し、今はその為に却つて無性格なものにすることを避けなければならない。

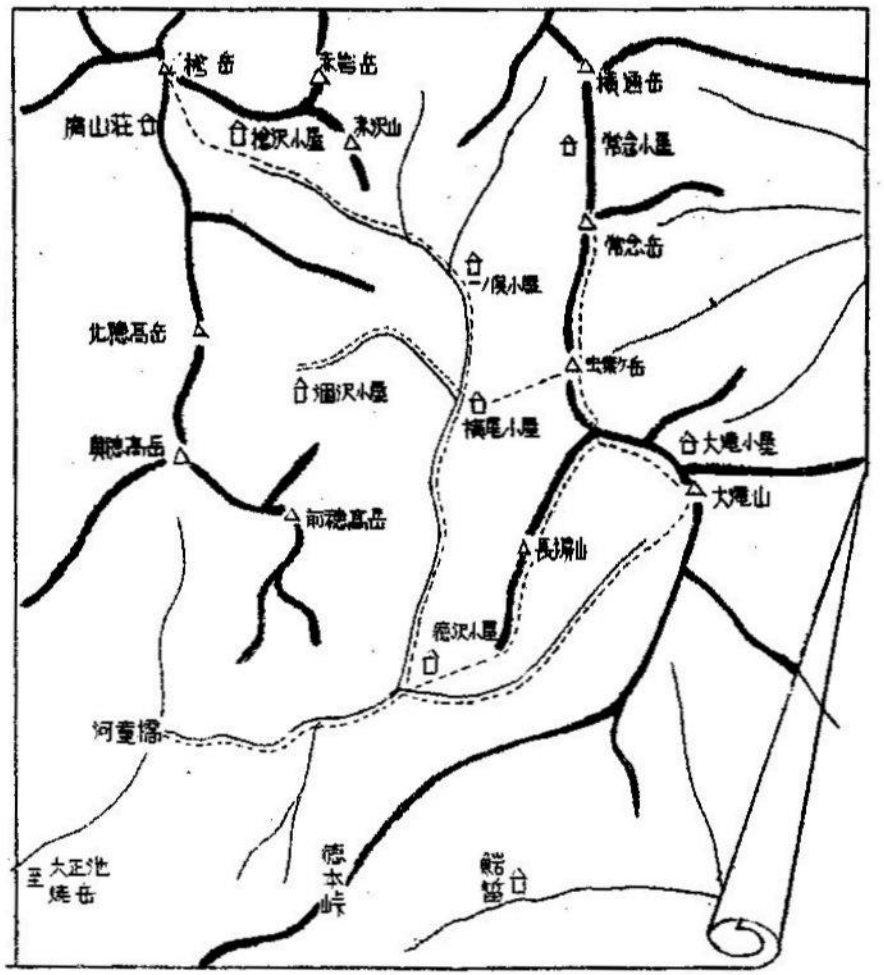
具体的解釈として私はまず、ワンゲルの技術の一主眼が団体行動の技術であり、一二年に於ては、炊事、幕営、歩行、リクリエーション、討論、記録等、部員一人一人が大きい団体の有能なる要素となる様に、三年ではその団体を円滑に動かす様に計画指導するリーダーとしての技術を養うために年二度の合宿と、リーダー養成合宿を行うのであり、合宿に大きな意義と内容を与へ、リーダー合宿に於ては、ワンゲルのリーダーとして団体行動の技術からして、その訓練は如何なるものか、前もつて大いに討論し合い、合宿中も個々の問題について検討し合い、形式的な技術と共に精神的な面が重ぜられることを知るべきだと思う。

別に主眼の一つは、個人的要求に関するものであつて、ワンゲルは広く門戸を開いて、個人個人の自由な要求をワンゲルの中で実現させる様なものでなくてはならない。こうした多くの要求が持ち込まれてこそワンゲルが多彩になり、拡大してゆけると信ずる。すなはち、ワンゲルの文化的活動はこうした各人の興味の結果の収積として各地に残る民謡、伝説、風俗を集め、風土、地形、地質、生物を調べ、各地の印象等も広く他の人に伝へるために、機関紙の発行の意義を明確にするべきである。

更に主眼の一つは、我々が凡そ行ける所全てに行き、広く各地の人々と親しみ、意見を交換することであつて、本誌中でも、木曽路の旅や佐渡旅行では、この点に於て成功していると云へるであろう。我々はワンゲルが世界的視野を有し、いつも社会の

夏期合宿及び

サマーキャンプ報告



中にある様な自覚が要るのである。己の足で踏み、その上で寝、その人々と親しく語つた土地に、例へば海水が浸入し、人々が困窮しているのを手をこまぬいて傍観出来るだろうか、我々がこうした事に際し、直ちに立ち上るのは正しい事なのである、ワンゲルの靴は兵隊の靴より強い、我々はその靴で世界を結ぶ役目もあるのだ。

以上、ワンゲルの活動の主眼となる様なものを三つあげたが、このうち前の二者は今後更に具体的に検討されるべきである。ワンダラーとして、誇りある自覚を持つためには、ワンゲルから如何なるものを学び、身につけたかと云う事が問題なのであつてそれには具体的なワンゲルの技術を部員に修得させる必要はあるからである。

又三番目の点については、ワンゲルのバックボーンに関係することであつて、我々はそのために、部が話し合いの場をつくり（学部の所在の異なる本学ではなほさら）討論の機会を多くつくり、山行や事務運営の準備や反省と云う具体的な問題の他に、こうした具体的でない問題をも取り上げることが必要であり、又部員以外の学生とも広く交るためにも、一般募集の山行や、展示会、映画の会なども開き、更に地方に赴いた時はそこの人々ともいろいろの面での交換が出来る様な工夫と計画が欲しい。

こうした問題に各方面から更に検討する必要もあり、詳しい点については云ひ足りない点も多く、重要な点についても割愛せざるを得なかつたが、今後部が開く総会の席でも再び問題とされる事であり、次号に於ては更に総合的にワンダーフォーゲルに対する問題を取り上げる予定であるので、盛りあがつて来た部内に於ける議論の手がかりになれば幸と思いこの短い文を書いた次第である。

夏期合宿について

田上栄一

三十二年創立した当時にワンダーフォーゲルと云うよりは、むしろハイキングクラブの性格をおびており、合宿も浅間高原で行い、参加部員も十五名足らずで、合宿と云えるものではなかつた。昨年三十三年度は部の性格もワンゲルらしくなり、合宿は二十数名で、　科山ー八ケ岳縦走の計画を試みたのであつた。しかしこの時は台風の後の低気圧の停滞装備、経験の不足の為に幕営を一回も出来ず　科山から引き返してしまつた有様であつた。その後個人ワンゲリングにより部員も経験を積み、装備も一応整つたので、今年は昨年の苦い経験から早めに計画を立て、北アルプスと決めた。参加部員も四十名位なので、全員での縦走を避け、集中登山の形をとり、集結地を霊の平と予定していた。ところが六月になり学校側と体育会より、サマーキャンプを担当してもらいたいとの所望があり、部会により承認した。合宿は七月二十日前後、サマーキャンプも七月中という無理なことになつたので、合宿をベースキャンプ形態にし、その場所でその後引き続きサマーキャンプを行うことにした。即ち横尾谷（実際は当地混雑の為、徳沢園）で七月十六日ー二十一日まで合宿、二十一日ー二十五日までサマーキャンプとしたのである。以上合宿計画の経過であるが、反省すれば、この計画は無理な、融通性のないもので、台風その他で、期間をずらすとなると大混乱をまねく恐れのあつた次第である。

しかし創立以来三年間、合宿一つを取つて見ても不完全ではあるが次第に成長してきた事がわかる。来年度は今年の経験を生かして、更に充実した合宿へと発展する事を望む。

先発隊

先発隊。それは部員の憧れの的である。希望者も相当いた。しかし種々の事情で我々四人だけとなつた。このメンバーは必らずしも最高とは言えなかつた。又自分でも自信はなかつた。だが我々だけで補・穂高等を登つたときの感激を、秘かに期待していたことは事実である。しかしこの期待は裏切られ、悲惨な結果に終つた先発隊のあらましを記すつもりである。

先発隊の目的は「偵察登山（槍・穂高大滝・蝶・常念）と同時に、テントサイト整備、現地交渉」。となつていたが、一番大切な偵察登山が全然出来なかつたということは誠に面目ない次第である。

出発は三日前の十三日となつていたが、折からの豪雨で一日延ばし十四日にした。バス連絡も当てに出来なかつた。このときからすでに偵察登山は無理であろうと思われた。見送りに来てくれた田上キヤブテンや藤岡氏等も、あまり無理するな」といつてくれたので、横尾のテント場の状態だけでも調べればよいと思つた。

甲府をすぎると汽車はガラ空き。諏訪湖を過ると去年の合宿が思い出される。

十五日八時に松本駅についた。上天気。バスは出るとのこと。但し乗り継ぎが二、三ヶ所あるとか。そんなわけでバスはとても空いていた。四人は最後部に陣どつて下手くそな歌を唄つた。併行して走る松本電鉄のガタガタ電車にも、何かしら趣きが感じられる。

順調なのはここまで、あとはどう考えてもまともではなかつた。

十時、沢渡の手前でバスがストップ。沢渡まで徒歩連絡。すぐそこらしいのだがなかなか歩けない。十二貫ぐらいだと思うが荷物がやたらに重く感じられるなるほど相当な土砂くずれで、これではバスはとても通れないだろう。

十分ほどで着くところを二倍以上かかつて沢渡についた時は、連絡のバスはすでに出たあとだつた。これがケチのつき始めで後々までもすべて調子が狂つてしまつた。我々の頭の調子までも。がつくりして汗をぬぐつていると、剣岳で松本、高橋、斎藤大樹の三人に会つたという人にあい、彼らが無事であること、テントの支柱を折つたこと、二十日返につかなかつたら迎えに来ないなどということを聞き、心配していた彼らだけにまずその無事に安心した。

さて次のバスが発車するまでに三十分以上も待たねばならぬらしい。本来なら今日中に横尾までたどり着く予定であるが、この調子だとまず不可能。ともかく上高地まで着けばよかろうと思い、バスを待つのも面倒臭い、次の中継地まで歩いちやえということになり歩き出したものゝ、どうも背中のリュックが重い。斎藤は元気でスタコラ先に行つてしまうが、小生とリーダー元さんはともすれば遅れがち。サブちやんも仕方なしに我々と共にのろのろ進む。何しろ四人でテントが五つだ。これでは先発隊だかポッカ隊だかわかりやしない、などと言い合ひながら、やつと第一のトンネルについた。その時バスがついたのも全く皮肉。天まで我々をお見捨てになり、朝はあんなに晴れていた空は雨雲でおおわれ、ついにポツポツ降つてきた。トンネルの入口で昼めしといつたつてありあわせのものを食つただけで、何が腹の中に入つたのだか今ではすつかり忘れてしまつた。

ともかく次のバスが出るところまで歩けというわけで、雨の中を又悪戦苦斗。平地であるし、リュックだつて本隊の連中と大して変りないのに（せいぜい十二、三貫）その歩き方たるやカタツムリと変りない。嘉納さんが見たら怒る前にあきれるだろう、などと考えながらものすごい土砂くずれを通過ししばらく行くと、「バスはここから出ますよ」と声をかけてくれた二人連れにあつた。この二人が後ずつと世話になつた日本山嶺クラブの絵ノ沢さんと森さんで

ある。一時半ごろそこについたのであるが、バスが出る二時半まで一時間雨の中で無駄話をしながら今夜の宿は上高地と決定。

三時四十五分に上高地着。四時に小梨平にテントを張り夕食。新品のビニロンテントに、四人で手足を伸ばして寝た。天気は回復。

明くる十六日は形式どうり五時に起き七時三十分出発した。ともかく、横尾にだけはたどり着かなければならぬ。隣りの絵ノ沢さんたちものんきで、我々が出かけるころやっと寝ぼけまなこで起きて来た。

「お先へ」「気をつけてな」というわけできれいに晴れ上つた空、夜露でかがやく草などには目もくれず（実際そんな余裕はなかつた）ただひたすら横尾へと歩いた。といつても昨日と大差なく、カタツムリ四人組は「コンニチワ」「お先へ」という声を残して追い抜いていく軽装備をうらめしげに眺めるのみだつた。

十時半徳沢園。昼食。食パンにトマトジュース。忘れもしない元さんのトマトジュース。大体我々に先発隊の食事はなつてなくて、出発前あわただしかつたので十分間でたてた計画は、野菜、調味料、副食を全部忘れてしまつたのである。

さて大滝・槍に登るには時間がきついし、おまけにこのリュツクではというわけで、リュツクを徳沢園にあづけ、空味で大滝登山口（徳沢を渡つて「大滝山まで三時間半」と書いてある導標のところ）まで行つた。空はカラリと晴れ、眼前に明神岳を仰ぎ始めてのんびりした一時を過した。一時に徳沢園に帰り、日大の診療所でサブちやんが指の手術をした。サブちやんはものすごくファイトがあり、手術したというのにケロツとして、横尾までの道のり眠い眠いといいながらリュツクの重みにも敗けず元気に歩いたものである。二時に徳沢園を出て、横尾に着いたのが四時四十五分だから、全く我々のだらしなさも大したものである。

横尾は、合宿及びサマーキャンプには不向

きだと結論し明日本隊に会つたら早急にベースの変更をしなければならぬと思いながら、第二日目の夜を横尾の河原で過した。明日は本隊を迎へに行くのが精一ぱいであろう。

十七日、快晴。例によつて五時起床。お粗末な朝食を食べ、七時半横尾発。テントはたてたまま。リュツクはテントの中へしまつたまま。途中徳沢で前途の日槇の二人に会い、よくあうなと笑い合つた。十時二十分、上高地についたが、本隊らしきもの一人も居らず。けつきよく十二時半までブラブラと待たされた。本隊に会つたときのうれしさ。今夜はうまいものが食えるぞ。

先発隊「遅かつたな。荷物かつがないぞ」

田上「いいよ。そのかわりめしを食わさないぞ」これには参つた。

来年は今年の失敗を繰り返さぬよう、よく計画をたて、立派な先発をしたいと思つている。

（吉野記）

七月十七日

昨夜十一時五十分松本駅に到着。台風の余禍の為バスの運行が危ぶまれたが、乗り継ぎでいかれるとわかり、定刻すぎ上高地へ向かつて出発した。途中土砂崩れで二ケ所ほどバスを降りた。初めの所では、我々の目前でがけが崩れてしまい、復旧まで少々時間がかゝるのでその間に朝食をすませた。二ケ所めの所では荷の重さも手伝つて一時間も歩かせられた。なにしろサマーキャンプの食糧もいくらかあつたし、野菜やパンは手でもつて歩いたのだから。トンネルの中でナスをばらまいた者もあつた。それから二台のバスに分乗して、上高地に到くと、先発隊が迎えに来ていた。

すぐ横尾にはいる予定であつたが、先発隊の報告により、昼食をとりながらいろいろ討論した結果、徳沢にベースキャンプを張ることにした。先発隊と米屋、斎藤の二人は横尾へ荷物を取りにいき、一隊はパッキングをし直して徳沢へ出発した。天気は

全く我々ワンゲルとしてはめずらしく晴れ上がり、汗が絶え間なく流れ出る。荷物は重たいし、ひと休みして飲む梓川の雪どけの水はすごくおいしかつた。

三時間遅々として歩いて、ようやく目的の徳沢に到着。荷を降ろした時の肩軽かつたこと。すぐにテントを設営する。なにしろ大パーティだから、たくさん並んだテントに通る登山者も驚いていた。

空腹にカレーのにおいが浸みこむ頃、荷を取りにいつた人達も戻つて来て、各班ごとに夕食となつた。

七月十八日　曇のち雨

食当四時起床、昨日のボッカの疲れでこれでは少し寝坊ということになる。大体用意の出来た五時頃全員を起す。各班テントの中で食事をし、本部、三班、二班は大滝へ、四班、五班は涸沢へと出かけていつた大滝班はせつかく登つたところ、視界ゼロである上に、雨さえ降つて来たので、すぐ下つてしまつたと言う。

涸沢

奥又白の絶壁を懸けた前穂高、それに続く穂高諸峰には重たく垂れかかり、そのけわしい山容になにかいつそう不気味さが漂つているようであつた。

七時三十五分、元気よく徳沢を出発した。がこれから訪れる山に不安は隠しきれず、そのうえあやしげな空模様に、一同顔がくもるようであつた。徳沢園の前から横尾に通ずる静寂な樹林の中をしばらく進むことになつた。この道は長塀山の西麓にあたりトウヒ、ネコシデ等、名も知れぬ低山高山植物の入り交つた林の中の平坦な道であつた。朝の冷たい空気は心の隅の不安を押しのけて胸の奥深くまで吸いこまれ、知らず知らずのうちに頭の中は残雪深い涸沢でいつぱいになり、はやる気持は押えがたかつた。

やがて長塀山の押出しを過ぎて右側の山据をからみながら行くと道は梓川の河原に開

け、沢を渡るとしばらくして横尾山荘に着いた。始めにキャンプを設営するべく予定した横尾は徳沢を出発してから五十分程の所であつた。山荘の前から沢に架けられた橋を渡ると、横尾谷の左岸の道に入ることになつた。このあたりはさほど苦しい登りもなく、全員気も楽々と快調であつた。左手に屏風岩の切りたつた巨大な岸壁を仰ぎながら進むこと四十分。本谷の丸木橋を過ぎる頃より道は次第に登りになつた。ついさつきまでの天気はどこえやら、ペースも乱れ、先頭の足に合わせるのにハーハー喘ぐ始末だつた。ゴツゴツとむき出した岩をよけようと足元ばかりに気をとられまわりの景色云々どころではなかつた。なおも続く厄介な登りにいさゝか閉口した。登りきると小さな雪渓にあい、しばらく行くと急に目の前がぱつと開けた。涸沢小屋下の大きな雪渓にかかつたのだ。いままでのつかれを吹き飛ばすように歓声が上つた。雪渓を越えた前方に、いくつものテントが雪の上に浮んでいるように見えた。虫のように小さく滑つてゆくスキーヤーの姿もわかつた。涸沢圏谷の全容が開けた壮観な光景にだれもかれも喜びでいつぱいだつた。雪渓の上を流れる冷風は、汗ばんだ体にひやりと心地良かつた。キャラバンシューズの足は冷たかつた。全員渡りきる頃、心配していた天気はだんだん悪くなり、とうとう雨になつてしまつよ。進むか進まぬか決めなければならなかつた。ここまで来てひきかえすことはなんとしても残念で、少し待てば、雨は上り、上まで行けそうな気がしたがそんなことはおかまいなく、雨はますます強くなり、体はきりきり冷たくなるのに耐えられなかつた。リーダーの一言で諦めなければならなかつた。「自然は冷たい」と本の中の言葉が思い出された。みすみす小屋を目前にして一同憤懣やるかたなきものがあつたが、とにかく下ることになつた。雨にあてられながら岩陰で昼食をすますとすぐ帰路についた。十一時三十分、いつま

でもいつまでも雪が名残り惜しかつた。、、
降り出した雨は止まず、ひどい降りの中で食当は、ずぶ濡れになつて夕食にてんてこ舞い。食事もそのため遅れ、八時頃、明日の天気を祈りながら、シュラフにもぐり込んだ。

（横手記）

8ミリ用品
カメラとシネ
合資会社 日光商会
鎌倉市小町六六
二ノ鳥居前

七月十九日

食当二班は二時、他全員は四時起床と決つた。食当は班内で話し合つた結果、早い起床に自信がなかつたのか、トランプをやりながら二時を待つたらしい。雨は昨日から降り続いていた。こういう日の食当は実際やつてみて、始めてその苦労が解るものである。全員四時起床はしたが、雨がはげしいので出発を遅らせていたが、七時過ぎても止まないので、山行は中止となつた。ワンゲルはついてないと嘆いていると八時過ぎ皮肉なもので、空に晴れ間が出、段々暑くさえなつてきた。互にくやしがりながら、それでも俄編成のパーティーで、槍ケ岳・澗沢・明神池へのワンダリングに出かけた。空の青さと雪渓と岩肌が驚くほど美しいコントラストであるのを、皆、心ゆくまで味わつたことだろう。明神池グループはスケッチブックを持つて、ぶらぶらと一時間半もかかつて、明神池へ行つたそうだ

七月二十日

食当五班は例の如く二時起床。他全員も月あかりで顔を洗う。

全く今年の合宿はついている。よい天気だ。待望の槍ケ岳行の本部、二班、三班はとくとくとしている。大滝は一班、四班だ。

大滝班は蝶、常念迄足をのばしたが、常念へは二人しか登らず、その二人もグロッキーになつて降りて来たらしい。槍の班は全員頂上をきわめたと、日に焼けて天気に戻つて来て、天然氷にミルクをかけて食べたのがすごくおいしかつたと繰り返し言つていた。

槍ケ岳

合宿四日目、私達は槍へ登ることになつたまだ睡い目をこすり、顔も洗わず食事を取る食当にもならず、連日大滝、澗沢と行て最初からバテていた私には、槍は無理であつた。でも行ける所まではついて行こうと思い、出かける事にした。途中の路は睡くてよく覚えていない、一ノ俣までは細いほとんど平地のような道。途中川の水で顔を洗う。冷たい水が肌に気持よい。槍沢小屋をすぎ、槍沢の雪渓が見える頃から、息が切れてくる。雪渓にかかると、もう前に一歩も進めなくなる程足が重い。皆に励まされて、少しずつ進むが、だんだん足がおくれる。ピッケルを借りて、それにつかまるようにして登つていつた。

ようやく槍が姿を表わしてきた。「もうすぐだ。」と自分自身を励ましてみても、足は依然として動かないし、息もハアハアしている。まつたく自分がみじめに思えた。

予定は屑小屋で食事をするはずだつたが、私が遅れたため、途中の岩で槍を仰ぎながら取ることになつた。皆に迷惑をかけ本当にすまないと思う。昼食の時のミルクの中へ入れてたべた雪の味は今でも忘れられない。ジーンと歯ぐきにしみ通るようよ快よい味である。

槍の姿はどこから見ても良い。何物をも寄せつけない様に孤立して、鋭くそびえ立つている。ようやく屑小屋へつく。ここからの槍は遠くからの姿よりも一段と美い。岩がごつごつして、取りつく所もないようだ。少し休んでから槍に登る。こわくて足ががくがくする。岩にしがみつき、ほとんど這うようにして上る。頂上は思つたより広く、眺望はすばらしかつた。周囲の山々を見ながら、高い所へ登つたと改めて感ずる。振り返つてみると、今のぼつて来た道がじぐざぐに細く長く続き、その下にずつと雪渓があつた。ここまで来るには途中で何度も意志がくずれそうになり、もう駄目だと思つたことか。そのたびに皆に励まされてやつとたどりついた。でものぼつて本当によかつたと思う。

七月二十一日

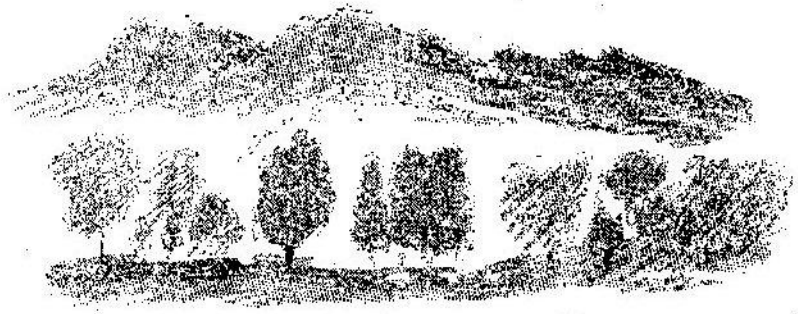
いよいよ合宿最後の日である。帰る者は十二人いたが、続いてサマーキャンプに残る者もそれ以上いた。今日の山行はなし、買出し組と、サマーキャンプを迎えにいく組と、テントキーパー組の三つに分かれて行動することになつた。八時三〇分頃それぞれ出発した。

上高地散策記

日はすでにキャンプ村一帯に降りそそぎ、人々の横尾へいそぐ足音がきこえる、だが俺の目はまだカスミをかぶつている、今日で合宿も終り帰れるのかと思うと心は踊る昨日迄の緊張感がふきとび、体中にねむけが充満する、帰りの昼食用のパン、チーズ等をみていると、家のメシが思いだされるいけねえ俺にも里心がつきやがつた。家に

待つのはオフクロだけ、だが俺も人の子、つばりオフクロは一週間見ないと恋しい、ねごとはさておき、今日は明神、大正池をみて帰るんだ。松本駅迄行けばいやなリーダーの任務も終るんだ。リーダーなんかやらされているとその臭気が体中にしみこむ様だ。はやく風呂にでも入つて汚れをおとしたい。皆の願によつて予定より早く徳沢を出発、明神池にいそぐ、しんがりを歩きながら女の子達と話していたが、あの話は夢か現実か俺にもよくわからぬ。多分夢の続きかもしれぬ。明神池についてみると、なんたる事まるで都会の泥池の如きながめ壊れかゝつたベンチ、泥のたまつたあさい池　だが前面の山々の美しいのがすくい。その上入場料迄取るとあつては、都会の池さながら、気分の悪い処は、早く立去るに限るとばかり梓川にそつて上高地へいそぐいつしか皆のペースも早くなり梓川のほとりの小梨平附近を通る。巨大な荷物を背負つたトランパー達、原色のズボンや上着をきたハイカー達のむれその背景の緑の木々やきよい流れの早い川、これらの作りだす風景が強い光をあびて油絵の様なはなやかさを作りあげている、河童橋に群がる人々がまるで橋を壊わすのかと思われる程うようようしている。河童橋の附近にたむろする連中どこかでみたと思つたらサマーキャンプの一般学生とそれをむかえるワンゲルの連中だ、うるさくてたまらぬ、まるで都会だ、同じうるさくても都会の連中の方が美しさとみだしなみのよさを持つているだけ親しみがわく、だが自然に対する人間の暴虐を嘆くまい、この連中の落ち金が旅館、店、松本市の経営に役立つているのなら、又これからの交通便別な観光地はこう云う物とあきらめて、その中に俺は俺なりの楽しみをみいだすさ、人が多いと嘆くまい、その大勢の人間を自分も構成しているのだから、いやなら穂高なりどこなり人の少ない所へ行けばよい、そんな所がなければ多い所で我慢するさ、習慣が人間を平穏にす

るさ　そんな事より俺は大正池へ行つて昼寝がしたいよ、暑いほこりだらけの道をバスにホコリをかけられながら歩いて行くと右手に赤い帝国ホテルの建物がみえる上高地のような高い所で高い金をはらつてとまるなら　槍、穂高のようなもつと高い小屋でとまつてはいかがです。少し先へ行くとやがて右手に茶店があり、その下にボート小屋がみえて来た　一寸可愛い女の子がいるなと思つて降りるとそこが大正池　大正池も我々ごとき昭和の愚連隊の乱入を嘆いていることであろう、いやよきカモ到来とばかり金をふんだくらんと待つていたかもしれない　そんな事より　大正池は美しい正面に茶色のハダを見せた焼岳　容易に人をよせつけぬ明神岳の偉容をくりひろげその水中に何本かの木々を抱き　底を浮びあがらせている背や緑色のすんだ水　その上をすすむ幾そうかの舟　力一杯こぐ若人その若人にほゝえみを返す娘　水面に照り返る太陽　美しい色の対照だ　そんな景色をながめつつ昼食をとる　乾いたパンを冷たいジュースが流してのどを通つて行くこれで今日の重大事（食事の事なり）も終つた　さあて我々も舟に乗るか　我々も三人づつ組になつて池の上の人となる　だが我々は元気がありすぎて一幅の絵を形成する人間となるには不適当のようだ、ボートを漕ぐ事を趣味とするらしき部員が力一杯ガールをひく〝きれいだ〟と感ずる瞬間ボートの親爺が叫ぶ　〇〇番そつちへ行くな、かくて我は主綱に返る、苦しかつたが又楽しかつた一週間の思い出が　ねむけと共に我におそう、のどかな気持、いつまでもこうしていたい、だがバスの時刻が我々を束縛する　バスの停留所でバスにのりなつかしい上高地を窓外に見ながら下るだが窓外の景色もねむりに妨げられてしまつたらしいバスはねむる我をのせて　々へといそぐ。、、、、、、、



昭和三十四年度
夏期合宿献立表
食料係　吉野大次郎

今年度の合宿の献立を下に掲げます。係としては最善の努力をしたのですがいろいろ至らない点、不満な点がたくさんあつたことと思います。次回への参考としてお読み下されたく又いろいろ御意見を下されば幸いです。

なお合宿に於ける食当の割当てについても御意見を下さるようお願いいたします。

8.4.年度　夏期合宿献立表

	朝	昼	夕
17日			カレーライス
18日	味噌汁 かんづめ たくあん	食パン ソーセージ ミルク キウリ	チヤーハン
19日	コンソメスープ ふりかけ	食パン チーズ 粉末ジユース キウリ	野菜とコンビーフいため つくだ煮
20日	味噌汁 かんづめ キユウリモミ	食パン ソーセージ ミルク キウリ	コンビーフライス サラダ （野菜・マカロハ）
21日	コンソメスープ ふりかけ	フランスパン チーズ キウリ ジユース	

反省

上高地より帰つて、一日おいた七月二十八日、経営学部に於て合宿の反省会が開かれた。

まず最初にチーフリーダーより、一・二年がよくやつてくれて助かつた。食料の買出しについてはもう少し研究する予地があり、その点全員の協力をおねがいする。荷物が多く、更にリュックが不均一の為荷が平均しなかつた。朝の出発がおくれたこと。来年からもう少し日数を延した方がよい等の報告、反省があり、次に会計より会計報告、各班のリーダーからの報告の後、一般の反省、討論に入つた。

その内でおもなものを拾つて見ると、

○時間にもつと神経質になるべきで、今後は行動を敏速に行うべきである。

○ベースキャンプを一回ぐらい動かすべきだ。

○来年から先発隊はルートを調べる方に重点を置き、合宿が七月なら六月頃偵察に入る方がよいのではないか。

○来年からリーダーが先発として行くべきではないか。

○計画はなるべく早くたて、偵察を行つて、行先を変えられるようにするべきだ。

○年度初めの総会でもつと徹底させておくべきだ。

○サブリーダーをしつかりさせて、リーダーは総括的なことに重点を置くべきだ。

○部員全体の親睦という点にも、もう少し気を使うべきであつた。

○食当の仕事をもつと楽にするよう、全員が協力するべきだ。

○集中的に合宿地へ入ることも出来るのではないか。

など活潑な討論が行われ、合宿の反省会を終えた。

サマーキャンプ

山を愛する者同志でキャンプ生活を楽しむ為毎年行われているのがサマーキャンプです。これは山岳部が担当し体育課主催で行われたものですが、去年よりその目的上ワンゲル部担当で開き度いと言う意見がありました。しかし残念ながら昨年は、ワンゲル部が文化部サークルであり、期間が少なかつたこと、それに技術が未熟でありましたので実現出来ませんでした。しかし今年より、山岳部の部の性格上ワンゲルに適しているとこちらにバトンを渡してくれました。学生課からも協力を約束して頂け、それに柴田教授も参加して下さると言う光栄を得ました。残念なことに体育会と体育科との交渉がうまくいかず体育科の先生方が参加なされないと言う事で体育の単位数はもらえませんでした。ですが十五人の一般参加者を得て総員五十二名に及ぶ大世帯になりました。二回ばかり経済学部で顔合せを行いまして、二十一日夜「穂高」で新宿を発ちました。山々の美しさを眼窩に映し、ファイヤーを開んで歌つた歌を耳に残して全員帰つて参りました。

出発

準急「穂高」は新宿駅を走り出していた集合時間は一般九時、部員八時と決められていたが、三十分程の誤差が生じ席をとるのに一苦労し、リュックを棚に上げ荷物を整理している内に汽車は既に発車していたのだつた。全員二十二名、外の三十名近くは上高地で既に五日間楽しんでいるはずだ。彼らの荷物目分達の分とで量が多く、スイカ六ツ、トマト二箱、それにしても全員席を得たのは幸だつた。席がばらばらの為に酔客の話相手にされた者も中にはいたが。全員上高地の期待に胸をはずませ車中は大変にぎわつたがやがて目を閉ぢ始め松本近くで目を覚した。松本駅で部員の恥を大きくさらして、反対側に出たりしたので、バスにおさまつたのは一時間以上遅れた。だが二台に分れて河童橋まで途中下車運行の憂き目を見ながら、たどり着いた。そのあたり一帯は、銀座とまでは行かなくても、伊勢佐木町通りの様な混み様、だが木々は美しく目にしみた。その中で乞食同様の服装に、熊の様なひげを生やした男が十二、三人たむろして、こちらに顔を向けて笑いかけていたかと思うと、近づいて来るではないか。おや〳〵どこかで見た顔だと考えていると、知つている筈だ。ワンゲル部員が食料を貰いにやつて来たのだ。握手をして全員の無事を喜び、久しぶりの再会に皆んな顔をほころばしていた。一年生のボッカの為に荷物を手離し、梓川の岸辺で朝食をとり、河童橋を渡つて旧道を行つた。道は平坦に近い山道。全たく楽である。三十分位に休憩を取り横浜国立大学と大書きした青と空色の旗を先頭にして歩き始める。途中明神池に出ると金十円の拝観料を出して、改造中の池の美しさに心を奪われて、昼食をとり又歩くこととしばし。やがて上高地の一部徳沢園に着くとワンゲル部員の歓迎がそこにあつた。冷たい川の水を飲み、テントに配置され、班を組んで楽しい食事を始めた。

（藤　林）

大滝・長塀山

六時四十分、我々はしつとりぬれた草をふみしめて、徳沢園を後にした。

天気は残念ながら曇り、前穂は霧のベールを厚くかぶつて我々の視野をさえぎつているが、しかしサマーキャンプ初の山登りであるせいか一行の足どりは軽く谷川の流れにそつて逆上つて行く。

天気の悪いのは残念ではあるが、それでも渓流の白い泡が、小鳥の声が我々の目を、耳を楽しませてくれる。時々うす日もさすかと思うと目の前の山はだを霧がかすめて通り過ぎて行く。やがて羽衣の滝の音を耳にしながら流れと別れて大滝山への登りにかゝる。九時十分大滝山への最後の水場を通過して十時三十五分大滝小屋に着く。相変らず霧が濃く、期待していた穂高、槍などの勇姿を見ることは出来なかつた。

食事は小屋ですることになり早目の食事が始まる。さすがに腹がへつたものとみえて皆よく食べる、パンもバターもチーズもその他持つて行つたものほとんど食べつくしてしまつた。食後、班ごとにかわるがわる歌を唱う。女性コーラスや、沖縄民謡などなかなか賑やかでたちまち二時間余りの時間が過ぎてしまつた。

一時過ぎ大滝を出発、蝶ケ嶽への尾根路を進む。途中から心配していた雨が降り出し、いよいよ悪コンデションとなる。わずかに山陰にのこつた雪渓を過ぎ二時過ぎ長塀山分岐に着く。どうせ蝶へ行つても景色も見えないのでこゝから長塀山を通つて徳沢へ下ることになる。

道はまだ新しく、よく整備されておらず、いたるところに木がたおれていたり、切株があつたりで歩きずらかつたが、変化があつておもしろかつた。

小一時間程で長塀山山頂に着き休憩する。頭上は青空ものぞかれ、時々霧が切れて穂高の山はだが見えるが、それも一瞬の間で又次の霧がとざしてしまう。そんなことが何回も続いたが結局目の前の穂高を見る

ことが出来なかつた。

長坪からは道らしい道もなく急斜面の林の中をかけるようにして下りた。しかし行けども行けどもふもとに行きつかず、そろそろあきあきした頃、急に目の下に徳沢園の赤い屋根が見え驚かされた。

かくして全員無事に帰着。サマーキャンプの第一日の行程を終えた。（白　井）

涸　沢

七月二十三日、涸沢と槍ヶ岳の二パーティに分れて、今日の行動をすることに昨夜決つた。涸沢グループは十一人、全員四時起床、別にそれ程急ぐ事は無かつたが、槍のグループが四時過ぎに出発するとの事で、こちらも同調した訳である。ところで起きたものゝ、ぐずぐずして、又それ程急ぐ必要性も無いと言う訳で五時過ぎに出発した。梓川の流れに沿つて前穂の移り行く姿を楽しみながら、横尾に一時間かからずに到着した。天気は曇り。そこで十五分位過したのちキャンプしている人達に声をかけ、テントの群の中を歩む。やがて少し道は勾配を得、山道らしくなる。左手に雄然とそゝり立つ屏風岩を見て、その登はん話に花がさき、「夏にロープを仕掛けるなんて。」と話を聞いて立腹する者、「いや、その気持は分るが……。」と同調的な者、いつの間にか、川に出会い渡る手前で又休憩二十分。そこを過ぎて山道を行く。皆少しくたびれた様子で、三十分程歩いた所で下に雪渓を見て休み、せんべいをかぢる。腹ごしらえの後、彼方に見える涸沢の雪渓を見つめて歩き始める。雪渓に近く上から吹きつける寒い風が気持を新たにしてくれる。やがて、目前に広々とした雪の原を見ると皆の足は早くなり出した。五分後涸沢小屋が見えた時、自分達は雪の広野の中に立ち、皆顔にうれしさを浮べワイドスクリーンに映し出された山岳映画の主人公に成り切つていた。しばしそこに立ちすくんだ後、下から感じる雪の冷たさに目分を取りもどした。食後一時間程雪渓の上で楽しみ、グリ

セードならぬシリセードで笑い興じ、幸運にも三日前に失くした友人の万年筆を雪上で見つけた者もいた。広大な雪渓と聳高連峰に別れの手を振り、下りの途についた。やがて来た通りの道に沿つて同じ川沿で二十分程昼寝をし、横尾を通つて、徳沢園に着いたのは三時過ぎだつた。（藤　林）

槍ヶ岳へ〆

七月廿三日。昨夜のリーダー会議で槍に行ける事になつたが、扨行くとなつても私は少々精力減退で勇み立つ気力もなかつたが槍沢迄でもと言うので行く事になつた。三時半起床。四時十七分、総勢二十七名の大パーティ徳沢園を後に出発。リーダー松本さん。薄暗闇の中を半分眠りながら歩く。今日も曇りらしく四時過ぎなのに明かるくない。天気が良くないと心もうつとうしい。平坦な道を歩く事一時間、横尾に着く。小休止して左側に涸沢へと続く道に別れて石のごろごろした河原を行く。川の向うから白い霧が流れて来る。こゝ横尾谷から南岳が見えるという事だが、今日は何も見えない。左手に屏風岩が見える。こんな所の登攀に成功したと聞いて驚いた。六時〇五分一ノ俣着。再び草の茂つた狭い道を上下して槍沢小屋に到着。上の大雪渓を見上げて槍の頂きを連想する私の頭の中には、今から引返そう等という考えは毛頭ない。小屋の下の河原で水をつめて出発。雪渓にぶつかると道はガレ場に入る。砂礫の登り道より返つて歩き良い。

未だ九時過ぎと言うのに空腹を感じ、前進する力が出て来ない。殺生小屋の下で乾パンを食べる。やつと皆の顔に元気が戻つて来た。座つている私たちの前方には常念ケ岳がよく見える。何だかとても良い気持。未だ頂き迄には半分しか来ていないけれど、下から吹いて来る風もおいしい。こゝで十分休憩して再び登る、肩の小屋近くで囲大山岳部隊に追いつく。重そうなザツクにも拘らず元気が良い。ワンゲル男子俄然威厳を取直したかすごい気焔。「おかしく

てクスクス：。」追い立てられて肩の小屋着。岩の間で吹きさらしの風にふるえながら昼食をとる。こゝは立山連峰へと行く道の合流点でもあるので、大分賑やかである。十一時三十分大槍に登る。鋭く切立つた岩、下を見ると目まいがしそうで恐い。晴れてなくて返つて良かつた。」等負け惜しみに笑い出す。十一時五十分頂きに着く。飛ばされそうな風、見渡しても白い雲ばかり。所々に連山の一部が見えるのみ。晴天なら北方に鹿島槍、白馬、野口五郎：。南に乗鞍、ジャンダルム、穂高と見渡せるのだが、残念にも皆目見渡しがきかぬ。播隆上人が祭つたと言う小さな祠の前で写真をとり、すぐ下る。上りより下りの方が更に恐い。上級生の注意に従つて慎重に下る。小屋着十二時四十分。元気よく山装を出発。途中雪渓を下る。槍沢でミルクを飲んで居ると、俄かに大粒の雨が落ちて来た。俄雨である。急いで槍沢小屋に避難し、十五分位雨上りを待つて小屋を出る。濡れた小径を猛ピッチで一ノ俣に着く。小休止して再びすごいピッチで徳沢に着く。足を痛めた人を除いて全員十七時三十分無事到着。天候には恵まれた方ではなかつたが、楽しい一日であつた。

（鋤　納）

七月二十四日（常　念）

柴田先生は細野で友人が待つているとのことで一の俣の沢沿いに常念に出て帰られることになり、私が常念の小屋迄お伴する事になつた。一の俣小屋で聞いたところによると、こわれた橋は新しくとりかえたから大丈夫、小さな黒部と云われるこの一の俣沢は是非、秋の紅葉の頃又おいで下さいと親子にも見える私達に親切だつた。ゆつくり沢沿いの道を行く。滝が多く、とてもきれいな静かな沢だ。時折岩の上等で休む折先生は「俣位の年になるとね、もうこの景色を見るのも之が終りだ等といつも思うよ」等としみじみと仰言る。滝が二本もどうどうと注き、うつそうと深い谷の中で、山人がふと印象づけられる様に私はこの沢に想

を刻んだ。雨雲がやつて来たが、この長い沢沿いの道は続いている。地図が少しおかしい等と話合つているとやつと常念の陵線がみえだした。時間が既に十三時を過ぎ、蝶ケ岳を廻つて徳沢に帰る私を心配されてもう難所は過ぎたからとしきりにうながされるので、私は先に小屋に向つたが、遂に強い雨となつた。小屋に着き食事をし乍ら主人に聞くと、蝶を廻る等今頃から無理だ止めた方が良いと云うので、もとの道を引き返えす事にした。具々も注意する様にと別れぎわに仰言られたが、猛つく雨は益々激しく、七段の滝の岩場では、これでもかと竜神の怒り一しきり荒れた。ガスが低くたれこめた谷あいを私は兎も角脇めも振らずに急いだ。登る時下つて来た人を追い抜いて横尾でやつと雨が上つた。

先生からは後日親切なお手紙を頂き、この雨上り常念の陵線で完全なブロッケン現象をごらんになつたそうである。

（嘉　納）

七月二十四日

昨日キャプテン会議で今日の日程は上高地周辺をワンダリングすることに決つた。相にくの小雨の中で六人ばかり大正池まで遊びに行つたグループもいた。しかし殆んどは徳沢に残つて、テントの中でトランプや他のゲームに興じていた。食当は小雨の中で昼食の為おしるこを作り始めたが数時間かかり、三時のおやつ代りとなつてしまつた。各テントから聞こえる歌声や、笑い興ずる声にせつせとメリケン粉でだんごを作つている者の顔には、つらさを通り越した淡白な顔に変つている様に思えた。上高地に来て二週間近くなる者も居り皆それぞれに疲れを感じている様である。この日の休養は誠に有意義なものがある様に思えた。幸に雨が上りキャンプファイヤーを開んで皆、この声穂高に届けとばかり声をはり上げ、寸劇に笑いころげた。

北アルプス漫歩

我々一般グループ一行が、岡大ワンゲルメンバーに参加して、上高地よりリュックの重さも忘れて、梓川の美観によい、河童橋を通り、又、雪渓の輝く穂高を眺め、思わず溜息をつき、明神池を経てやつと徳沢園キャンプ地についた時は、明日よりの山行の期待と興奮とで、その日の疲れも忘れるばかりであつた。

まずこてしらべに、大滝山より長塀山を横切つた日は、雨がちで、期待した槍の姿も見られず、唯苦心して歩いたのみであつた。しばし飲んだ水の冷たさが、今だにフツと思い出される。一日休んであくる日、天気は上々、槍と穂高嶽の二つのパーティに別れて早朝より出発、めざすは穂高と思うと気力も自然にわいてくる。リイダーに従い、一歩一歩と無言で進んで行く。パーティ一人、一人の足が、力強く朝露を踏んで行く……。ところどころで丸太の橋を渡り、数時間後には広い雲どけの道に出た。

除々に雪が白く硬くなつていくので、雪渓にさしかかつたなと思つた。前の人の足跡に自分の足を入れ、すべらぬ様に注意して進んだ。太陽の光が雪に反射し、まぶしくとても暑かつた。時々上をむくと、まつ青な空が仰げた。ついに潤沢小屋の近くを迂やつて来た。ここではまばらにスキーを楽しむ人々や、ムカデの様に一列に並んで北穂をめざして進む人々も見られた。北穂高、前穂高がすぐ近くに見え、何処を見渡しても、雪と、灰色の岩と、ダークグリーンの山肌と、青い空のみである。こんな飽くことなく近く山を眺め、その存在を自分で確かめ、雪上を滑つた時、思わず歌を口ずさんでいた。

穂高の雪の天然冷蔵庫で冷したジュースの味、雪と砂糖をまぜて飲んだ味、これらは、キャンプファイヤーでの仮装騎ぎ、早朝よりの大根おろし、ワンゲル部員によるおいしかつた食事の味と共に永遠に忘れられぬ御馳走として、深く脳裏に刻んで、夏の思い出の一ページを閉じたい。

帰省

七月二十五日、いよいよ上高地とさようならである。部員は後に残つてテントの片付けの後出発し、一般参加者はお先に出発する予定であつた。最后の食事に舌鼓を打ち、記念写真を写つて一般参加者は、二人の部員と一緒に、徳沢を後にした。心持ちか足が重く感じられ、何か忘れ物をした様な気持。後髪を引かれるとはこの様なものだろうか。名残りを惜しみながら明神池を過ぎ表道を歩み続ける。一時間足らずで河童橋に着き、再び都会に足を踏み入れた様な気持である。バス乗り物で全員解散を告げられ、最后の名残りを惜しんで二組に分れてバスの上の人となつた。一方部員はテントを片付けて、前に足を痛めたH氏をリヤカーでバス停留所迄運んだF氏と一緒に横尾に別れを告げた。全員行きと変らぬ大きな荷物を持つて、何度となく往復した道を掛け声を掛て進んだ。列を乱すと上級の叱声が飛ぶ。たつた一時間のトレーニングの後上高地停留所に着き、バスに乗つて、帰途についた。

昭和三十四年度サマーキャンプ献立表

食料係　吉野大次郎

今年度のサマーキャンプの献立は左のようなものでしたが、次回はもつと工夫を重ね、素晴らしきものにしたいと思つております。

	朝	昼	夕
21日			豚汁(コンビーフ) 野菜のコンミート いため沢庵 つくだ煮
22日	味噌汁 大根おろし 白須千 かんづめ	フランスパン ソーセージ 粉末ジュース みかんの缶詰	チヤーハン コンソメスープ
23日	食パン 紅茶 チーズ	パン ソーセージ ミルク キウリ	カレーライス トロロコブ汁 野菜サラダ
24日	味噌汁 大根おろし つけ物	パン ジユース 果物缶詰 しるこ	ハヤシライス ヒモノ
25日	味噌汁 つくだ煮 ふりかけ	弁当 (にぎり飯) 缶詰	

反省

合宿の反省会に続いて、サマーキャンプの反省会が行われた。

合宿と同様、ユーフリーダーの報告、反省、各班のリーダー報告があり、討論に入つた。

こゝでもいろいろ議論があつたが、

○始めに歓迎会を開いて、部員とサマーキャンプ参加者との親睦をはかるようにしたらよかつた。

○初日に行つた紹介などの計画を、もつとしつかりたてるべきであつた。

○キャンピングを主体にするべきだ。

○参加者も部員の仕事を手伝つてもらつた方がよかつたのではないか。

○全員が集つてお互いが親しくなるような計画も必要であつた。

○男女まぜた班を作るべきだつた。

などであつた。

この後、今後のサマーキャンプについていろいろ討議され、改善すればやつてもよいという意見もあつたが、もう少し検討する余地があるという程度にとゞまつた。

食当悲歌

食当……それは主婦の気持。早暁二時起床。あたりは月明りかさもなくば真暗。他のテントはシンと寝しずまつている。あゝなぜ俺だけかくも早く起きねばならぬのか〆。食当　全く家庭の主婦と同じだ。ただひたすら且那様のためにいそいそと朝食を作る。暗い、けむい、眠い。薪割る音に且那様方は安眠をさまたげられるらしい。雨でも降れば地獄の苦労。燃えつかぬかまどに石油をぶつかけりゃ、なんたる事か油は鍋の中へ。味噌汁の上にギラギラと浮いてしまう。「こんなもの飲めるか〆」。鍋ごと捨てて又やり直し。食当……あゝ主婦はこんな気持で朝食を作るのか。

そろそろ出来たらしい。「めしはたけたか？」「もう少しだ。それより味噌汁はどう

したんだ」……

「そろそろ起きてくれ」……「もう三時だぞ起きろよ」……「おい、早く起きろ」……「早く起きねえとたたき起すぞ〆」……醤生こつちの苦労も知らないで寝ぼけまなこ。

さあめしだ。はんどうを配れ。味噌汁を配れ。ふりかけはどこだ。……「おい食当本部に飯を食わせないのかね」。「あゝいけねえ忘れていた」。（どうもすいません）「おーい、食当、お菜はまだか〆」「いまスぐもつていくぞーッ」（それあおげあおげ、お茶つ葉を入れろ、空の飯盒が足らないぞ急いで洗つてこい。）おおこのあわただしさ。

リーダー「飯が終つたらすぐ出発だ。食当弁当を出してくれ」……ガタガタ、がやがや。「行つてきまーす」「気をつけて行けよ」

やつとうるさ方がお出かけになつた。あたりはすでに太陽の光が満ちあふれているしばし茫然。気が抜けてしまつて何もする気がしない。

「一ねむりしようや」「うん、寝具を乾かさなくちゃ」。「まてよ、俺たちまだ朝めし食つていないぞ」「そうだめしを忘れていた」。「おい、残つたものかき集めて来いや」「お菜だけわかしやいいな」「よかろう」……

「腹がいつぱいになると眠くなるな」。

「食器このまゝほつたらかして眠るべえや」

「一つのテントに一人ずつ寝よう。中のシュラフや毛布は外にほつぽり出せ。」

「きたねえなこのテント。ごみためと同じだ。」「俺のテントはきれいだぞ。」

……

（むずむず蟻が体をはつている）あーあ、

「何て暑いんだ。寝てられやしない。」「俺達が食当のときこんなにいい天気なんだからな。」

A「今頃どのあたり歩いているのかな」

B「朝めし栄養が足らなかつたから腹へつ

たろうな」

C「今夜は何を作るんだろうな」

D「あゝだるい。ぼさつとしているより歩いている方がくたびれないや。」

リーダー「そろそろ片づけよう。お前は食器洗え。お前は：：：：。お前は：：：：。」

（ブツブツ　のろのろ）：：：：：

「昼めしにするか」「昼めしって何を食うんだ」「何でもいいから食えるものはみんな食つちまえ。」：：：

「おい特別料理だぜ。こんな珍味は天蟲だつて食つたことないぞ」「当り前よ、地上でそんなもの食つたら一ぺんに死んじまわあ。」（畜生暑いな、洗たくでもするか）

「さて昼寝でもするか」「お前はよく寝るなあ」「あーあ、天国へ行つたような気持がするぜ」　旦那様が出掛けた後、主婦はこの様なのんびりした一時を過す。然し思いは山の旦那様方へ。事無くあれと祈つている。自分遥食当が居たから彼らは山へ行けたのだと内心得意。

「さてそろそろ晩めしの用意だ。お前らはまき拾い。お前は米をとげ。お前は：：」

（だれだいつまでも寝ている奴は）

「今日の晩めしは一番上等だな」「そうさ俺達が食当だものな」「うん、なかなかいい味だ」（食当つてのはな、つらいみたいで案外いいもんだぞ。何だかうまいもの食えるからな）「朝味噌汁の中に油をぶつこんだ時は驚いたぜ」「あのまま飲ませりゃよかつたな」「おい飯こげてるんじゃないか」

「帰つて来たぞ」　「ただ今、　只今」

「早かつたな、どうだつた」

「うん素晴らしかつたぜ」　（よかつたよかつたと思うが自分も行けたらなあと一寸ひがむ：：主婦が旦那様のお迎え）「のどが乾いた何かないか「麦茶が冷えてるよ腹へつたろう。もうすぐ飯だからな」「今夜の飯は最高だぞ」（食当御苦労さん。この一言で満足。益々サービスしちゃう）又来年もこんな気持で食当をやるだろう。

八月暑日

合宿サマーキャンプ記録

4：00	起　床
5：05	松本発
6：30	沢渡着
7：00	朝　食
8：30	発
8：13	バス乗換
11：40	バス発
12：30	上高地着
14：00	上高地発
15：00	明神池着
16：00	徳沢園着
19：30	食事始め
20：00	リーダー会議

7月18日　曇り雨

6：00	起床・体操
6：30	食事始め

（徳沢組）（4・5班）

7：35	徳沢発
8：25	横尾着
8：40	〃　発
9：25	休　憩
9：35	出　発
11：30	食後出発
13：30	横尾着
14：00	横尾発
15：00	徳沢園着

7月19日

7月14日

23.55	新宿発

7月15日

8.00	松本着
8.35	〃　発
10.00	沢渡手前着

バス乗り継ぎ

15.45	上高地着

7月16日

7.35	〃　発
10.30	徳沢園
12.30	大滝山登山口
14.00	徳沢発
16.45	横尾着

7月17日

7.30	〃　発
10.20	上高地着
12.30	本隊と合流
13.30	上高地発
17.00	横尾着
19.15	徳沢園着

20日迄合宿以降サマーキャンプ

13：00	新宿駅に集合
13：30	新宿発
23：34	松本着：仮眠

7月17日　曇のち晴

12：00	槍　発
12：50	肩の小屋着
13：00	出　発
13：15	殺生小屋着
14：05	小休止
14：45	槍沢小屋下
15：00	小屋に入る
15：15	発
15：53	一ノ俣着
16：00	遅れた3人着
16：04	発
16：32	横尾通過
17：23	徳沢着
18：30	食事

7月24日

6：00	起　床
19：30	キャンプファイヤー

7月25日

5：00	起　床
6：00	朝　食
8：00	写真をとる
11：20	徳沢発
12：00	明神池着
12：20	〃　発
13：10	バス発着所
13：55	上高地発
16：50	松本着

7月26日

4：30	新宿着
5：10	解　散

5：00	起　床
5：30	朝　食
6：36	出　発
7：35	小休止
7：45	発
9：07	長畳山
10：35	大滝小屋着
	小雨強くなる
11：30	朝　食
12：55	発
14：05	出葉ケ岳着
14：15	発
14：45	雪渓着
17：15	徳沢園着
18：30	食　事
20：00	寝る

7月28日（小雨）

3：00	起　床
3：30	食　事

（槍）

4：20	発
5：20	横尾着
5：25	発
6：05	一ノ俣着
6：15	小屋発
7：07	槍沢小屋着
9：20	大槍ヒュッテ800M下
9：55	小休止
10：30	槍ケ岳山荘
11：45	槍に到着

8：15 8：30	休　憩
10：15	昼　食
11：30	肩の小屋着
11：55	槍頂上
13：00	肩の小屋
14：00	キャンプに伝令を出す
15：55	伝令徳沢着
18：30	食　事
19：00	計画発表
19：50 20：25	キャンプファイヤー
20：40	リーダー会議

7月21日　晴

5：00	起　床
5：30	食　事
7：20	サマーキャンプ 出迎えに行く 買出しに出る 帰省出発
8；30	上高地着朝食
12：00	明神池昼食
13：00	出　発
14：00	徳沢着
16：30 17：15	リーダー会議
17：20	顔合せ
19：30	買出し帰る

7月22日　曇り

（大滝山）（1.2班以外）

4：00	起　床
4：30	朝　食

（槍沢行）

9：30	徳沢園発
10：15	横尾着
10：20	横尾発
11：00	1ノ俣小屋
11：10 11：45	昼　食
12：30	槍沢小屋着
12：50	〃　発
13：30	雪渓に出る
14：20	〃を発つ
15：40	1ノ俣小屋着
16：20	横尾着
16：25	〃　発
17：10	徳沢着

7月20日　晴

3：20	起　床
3：40	食　事

（槍ケ岳）（2・3班）

4：30	出　発
5：10	横尾着
5：15	〃　発
6：00	2ノ俣着
6：50	槍沢小屋着
7：05	〃　発
7：40	休　憩
7：50	出　発

参加人員　三十八名（合宿）

チーフリーダー　田上栄一

会計　吉田輝義

記録　吉田輝義

写真　宮内幹生

一班リーダー　藤岡

斎藤隆　岩村美智子　渡辺孝英

平林茂　石田陽子　鋤柄栄子

二班リーダー　吉田和夫

米盛勝利　倉田代　高橋俊吾

三神広臣　宮崎裕子　田中康子

三班リーダー　小野三郎

斎藤彦司　腰塚典明　斎藤大樹

吉村元孝　緒節紀代子　平野ミドリ

四班リーダー　望月元雄

鈴木亘　氏平裕子　江崎伴雄

金子精彦　甘柏佐紀子　横手敏江

五班リーダー　吉野大次郎

室田良二　仁藤誠　白井信行

高野京子　山田栄子　松本正雄

参加人員　五十名（サマーキャンプ）

本部

チーフリーダー　嘉納秀明

会計　佐藤文雄

記録　横手敏江

薬　緒節紀代子

医　柴田教授

一班リーダー　松本正雄　高橋俊吾

金田精彦　渡辺孝英　斎藤大樹

二班リーダー　藤岡暉生

吉田輝義　栗田武寿郎　腰塚典明

三班リーダー　江崎伴雄

白井信行　望月元雄

鴻村明　児島日出虎　田上市造

新井夏之輔　片岡実三雄　福田功

四班リーダー　田上栄一

吉田光志　国頭正二　大城幸吉

与那嶺和夫

五班リーダー　吉野大次郎

加茂博夫　笠井芳通　井上宏

守屋繁治　甘柏佐紀子　田中康子

六班リーダー　氏平裕子

荻野高子

岩村美智子　宮崎裕子　大庭まさ江

山口栄子　若間佳子　平野和歌子

七班リーダー　藤林徹

斎藤彦司　平林茂　吉村元孝

鋤柄栄子　石田陽子

二年　強化合宿

五月の連休を利用して、中堅部員たる二年の為の強化合宿を行つた。

強化目的としては、ポッカ練習（八貫背負うこと）長距離徒歩、キャンプ技術、登山技術の練習で、それに適合した場所としていろいろ検　した結果、西丹沢と決つた。ところが、工学部の都合が悪く、五月四日と五月八日　十日の二回に分かれて行われることになつた。

二年生の為の合宿でありながら、才一回才二回あわせて、二年生が五名しか参加しなかつたことは、大いに反省すべきことである。二年生はもつと奮起して欲しい。

才一回　五月四日

参者　年　嘉納、吉田（和）吉田（輝）

二年　渡辺、森山

予定としては、白石沢から加入道、大室のコースであつたが雨の為陽本沢から大越路長者舎小屋に抜けた。荷物は各自三十キロ。

	23	20
発	1	00
着	1	15
発	1	45
	（雨降り始む）	
着	2	00
	3	30
	（朝食）	
発	7	40
着	8	30
発	9	00
着	9	45
発	100	00
着	10	45
発	111	00
着	12	15
発	14	00
着	16	00
発	16	26

谷神落　縄〃合　〃川　中　〃　白石沢出合　〃　湯沢沢出合　〃　犬越路　〃　長者舎小屋　〃野橋　大バス

才二回　五月八日～十日

参加者　三年　田上　望月　佐藤

二年　吉野　斎藤　倉田

雨に降られた為、雨中でのテント設営、食事作りと、風雨の中をぬれながら寝たことは大いに役立つた。荷物は二年生六～七貫ぐらい。

八日	横浜発	21：58
	国府津着	22：58
	〃発	23：05
	谷着	23：37
九日	〃発	00：05
	神着	1：40
	オ一トンネル	1：55
	（夜食）	2：25
	中川温泉着	2：40
	〃発	3：55
	オ二トンネル	2：50
	（朝食）	4：00
	ヨウケの沢出合	6：30
	テント設営終了	7：00
	朝食準備完了	8：00
		10：00
	就寝	11：30
	起床	11：30
	夕食用意開始	16：00
	夕食	18：00
		18：30
	就寝	19：30
十日	快晴	
	起床	4：30
	朝食	6：00
		6：30
	出発	7：00
	小休	7：45
		7：55
	白石峠着	9：00
	〃発	9：25
	加入道山	9：50
	破風口	10：07
	〃	10：15
	大室山にて昼食	11：00
	〃	12：30
	大越路	13：05
	水場にて小休止	13：17
	長者舎	14：45
	〃	15：20

途中オート三輪者に便乗させてもらう橋

	上野田	16：15
	原野着	16：23
	発（橋本行臨時直通バス）	
	橋本着	16：28
	発	17：55
		18：07
	（神奈川行横浜線）	

そこを通り越すと後は割合なだらかであり楽になつた。皆の足もなれてピッチも上り汗がジットり背中をぬらす。しかしその中に朝食が早かつたせいか、だんだん腹の方が苦う事をきかなくなつてしまうし、時間も丁度お昼であつたので杉林の中で食事をすることになつた。たき火の煙が杉林の中をゆらゆら上つて行く。その時の食事のうまかつたこと。

一時間ほどで腰を上げる。杉林を出るともうあたりに大きな木はなく強い日の光が全身に降りそゝぐ。今まであまり他のパーティに会わなかつたが、この辺に来ると頂上も近くなつたせいか、若い人達の一行がこゝかしこに休んでいて「こんにちわ」の挨拶も急しい。人の多いこと町中と同じである。それでも、最後の急な坂を登り、人だらけの頂上の中にぽつんと立つている三角点にタッチ、そうしている間にも続々とやつてくるので、早々に頂上を下り水場で休む。汗の出つくした身体には冷たい水はなんとも言えない位うまく感じられた。

下りは急な坂をいつきにかけおりる。後は平たんな道で、やつと皆の気もうちとけて、歌声も出るようになり、苦労せずに鳩ノ巣に着いた。こゝで一応解散したが、皆渓谷へ降りて夕やみのせまる奥多摩の景色を楽しんでから暗くなつた渓谷を後にした。

こうして我々新入生歓迎の一連の行事も終つた。

上級生の参加が少なく親しく上級生と話合う機会がなかつたのは残念ではあつたがそれは時が解決するであろう。

我々は自然に対するあこがれを多かれ少なかれ持つている。

自然に親しみ、自然を楽しむ。これは最上の喜びであると思う。その点、我々が今まで満たされなかつた何物かをこのサークルに見出したような気がした。

（白　井）

新入生歓迎登山

奥多摩　川苔山

うす曇りの朝であつた。

我々は思い思いのスタイルで新宿駅へ集合する。すでに何人かの者が集つていたがその中に上級生の制服が目につく。

臨時電車は行楽シーズンで初の日曜日の為か登山者で一ぱい。上級生が先輩づらをしてさつさと床に坐込む。たちまち一年も右へならえ。立川からは更に詰込んで通勤電車並。

やがて川井に到着。やつと誰が我々の一行のメンバーかわかる。人員点呼の後バス道路をしばらく歩く。

天気はいかにも春らしい感じで日射しがあたりの山々を緑に染めていて、ひさしぶりに見る山並が特に美しく感じられた。

道は山道となりなかなか急であつたが、

伊豆一周ワンダリング　二年　森山　武

無計画性、それも危険性なく、金、暇のある限りにおいてのみ。

八月二十一日

思うども、秋の海辺に、うちむれて
心ゆくまで、たびねしてしが

朝飯中驚ぎ出した虫にそそのかされ、直ちにパッキングする。伊豆一周、今日の宿泊地は田浦島あたりと定め出発。テント、シラフ、米一升を持ち、他は真い継ぐ事にした。七時四〇分、伊東、下田を経て三井口着、台風十号の影響か雲の行ききが激しく不安だ。途中兎の親子に出会つたり、大きなトンボに驚かされながら田浦島への道を急ぐ。あたりは全つたく人家なく、淋しい海なりの音が大きくなり十八時二〇分田浦島に着く。

強き風、雲のゆききの激しきに
ねぐらをかえる、兎のおやこ
ろの音や、ひなびし声を遠び来る
秋の風にも、みやびしこゝろ

田浦島は相模湖の南東につきだした半島で、ぐつと喰いこんだ小湾が中央にあり湾には色々な岩がそゝり立つている。湾をとりかこむ周囲は天然の芝生におおわれ、所々には赤黄の秋花が色彩をそえ、牧場の小牛や小馬がいてもよさそうな静かな浜辺だ。しかし全く淋しいまでに人気がなく二、三の廃屋と白い燈台が印象的だ。八時就寝、　の声がすみ渡り波が銀色になつて寄せては返している。どこからか、いつのまに蓄長の鳥がやつて来て餌をついばんでいる。風が強く雲が切

れぎれに吹きとばす彼に、月明りで急に明るくなる。波の音と虫の声以外何も聞えぬ。

吟　秋　夜

四壁虫声秋正深　四壁の虫声秋正に深し
無人燈台光明滅　無人の燈台、光、明滅す。
万憂難遣眠難成　万憂やりがたく、眠なりがたし。
松風吹伊豆旅心　松風吹きすさび伊豆旅の心。

町の灯を、振ひて逃げし、我なれど
かえりて、怨ゆる、町のざわめき
このわびしさに怨ゆる町の灯

八月二十二日

田浦島発　須崎　恵びす島
須島　下田　石廊崎

石廊崎は伊豆の最南端、附近はすこぶる暗礁が多く、本邦水路三険中の随一に数えられているそうだ。右に遠州灘、左に相模灘前面に広茫たる太平洋を望み、伊豆七島が

はるかに点々と浮き上つて見える。強風の為崎の突端まではうようにして行き、下を見ると測り知れぬ深淵で波浪が相折つては砕け、岩をかみ、飛　を飛ばす光景は何ともいえない。

石廊崎発－仲木－入間－一色－妻良

途中早大のアベックと土地のおばあさんと一緒になりお互意気投合し、にぎやかに道を進む。その日はおばあさんの世話で妻良のお寺に泊めてもらい、アベックさんのままごと料理　、頂いた　身に舌鼓みを打つ夜、近所の人達と色々語り合う。

好意ある、人に出会いて語り合う
この嬉しさは、旅にのみある

九月三十三日

妻良　子浦　落居　伊浜　波勝

波勝は御存じ野生猿の生息地だ。早速恥しげに赤い顔をし、何もそうまでしなくてもよいのに、お尻まで真赤にしてのお出迎えだ。一匹片眼の猿が目を引いたので土地の人に聞くと、あれは石松猿といつて、この前までボスだつたが、今では片眼を喰い取

られその地位を奪れたとのことだ。そういえば何か寂しそうな後姿だ。

ふん、俺は片目の石松猿よ
恐に破れ、名誉をもはがれ
片目を失う恥辱もうけた
ふん、それがどうしたというのだ
おめおめ生きているというのか
俺は死等まつたく知らん
ふん、そりや寂しい
しかし生きぬくのは勝手だ
それ位の自由は持つている
俺は猿だからね、片眼のおいぼれだね

波勝……雲井……松崎

波勝より舟で松崎に向う、伊豆の西海岸を巨岩奇岩の間をぬつて進む、徳富蘇峯伊豆が赤壁と名づけた絶壁の横を通る。千貫門という天然の大空洞の中を進む、〝爽てもりさん〟と呼ばれる珍岩も見た。松崎着、親しくなつたアベックと別れ土肥に向う。土肥着一六時二〇分、土肥は温泉と海水浴で有名な所、海岸の松林にテントを張る。

夜雨の為附近の家に押込み親しくなつて子供達と、トランプをしたり、温泉につかつたりし、又土地の人々とよもやま話に興ずる。何処でも好意に満ちた人と会わないことはない。最后の夜も楽しく過せた。

子供らと、最后の夜を語り会う
立ち離れがたき、伊豆の湯けむり
想い出を、胸に秘めりし、一人ねる
たちまちせまる、町のざわめき

九月二十四日

土肥……沼津……横浜

木曾路

山田栄子

私が木曾路を歩いてみたいと思つたのは、まだ受験勉強で頭痛はちまきをしている頃からだつた。

どこかの大学にすべり込んだら、サブザックを肩にフラフラと歩いてこようと胸に描いていた。

その機会を得たのが合宿だつた。

立野祭の日に私は平野さんと図書室で会い、二人で「旅」のページを繰つていた。私が前から目をつけていた木曾の紀行文を平野さんも眺み大いに二人で意気投合したのである。それに上高地からの帰りには丁度よい。松本から名古屋行きに乗り、木曾福島で汽車を捨て、そこから歩けばいい。全く稲妻の如く素早く決つたのである。

最初から歩ける所まで歩き、日が暮れたらそこでお寺か、農家を捜す予定であるから、宿屋の間合わせはいらぬししく簡単である。

かくして、私達二人は、わずかな資料と地図を手に旅立つたわけである。

木曾路

七月二十二日

昼近く木曾福島駅に着く。

ここは御岳、駒ケ岳への登山口であり、山山の間をぬつて木曾川が流れている。この駅に降り立つたら「名物ソバ」を食べるべしとあつた資料にもとずいてソバを食べる力強くしかものんびりした感じの木曾節が

駅の構内にひさき、私達はそれを三回程聞いてから出発する。途中木曾川にはつ対面してしばらく行く内にトラックに便乗、午後二時、上松に着く。一時間程歩いて「寝覚ノ床」を見る。この辺りは川幅が狭く、両岸の岩壁が奇妙な形に侵蝕されている。数メートルにも及ぶ岩の底を木曾川が静かに流れている。ちよつと神秘的である。この岩で昼寝でもと思つていると雷が鳴り出し、大粒の雨が降つて来た。私達は急いで山道をかけ上り、お寺で一休みした。こゝで無銭旅行を続けている高校生に会い、旅は道ずれと一緒に午后五時、寝覚を出発し途中小野ノ滝を見て又歩き始める。

「木曾は山の中である：：」島崎藤村の言葉のまゝである。

午后八時、須原に着き定勝寺というお寺を捜しあて頼みこみ泊めてもらう。こゝは由緒あるお寺で明治天皇の行在所だつたそうだ。

遅い夕食にキューリとジャガイモをごちそうになりおつさま、大黒さま、新命さん等に面白い話を聞き十時半床に入る。私達は明治天皇のとまつたという書院の間に寝たが久しぶりに畳の上に寝てやつと人間らしい気がして嬉しかつた。

私達二人が木曾旅行を思い立つたのは旅という本の、東山魁夷という画家の紀行文からである。この東山氏も同じように須原で定勝寺に宿を借り、ことわられている。なんだか一人でおかしさがこみあげて来た。

七月二十三日

朝五時、読経の声に目が覚めた。飯盒をかまどにかけておいて、寺の境内を見物した。皇女和ノ宮や木曾義仲に関する石碑がある。朝食をすませ荷物の整理をして、十時、お寺独得のはすの花の菓子でお茶をごちそうになり皆で記念に写真をとり十時三十分定勝寺を出発する。

そして又昨日と同じ木曾路である。

十一時三留野に行く自動車に会い又これに

便乗して一時間余り木曾寺をドライブとしやれこむ。

一時二〇分妻籠に着く。この妻籠からいよいよ旧中山道になり木曾川にしばしの別れである。木曾川をよく眺め、清水でのどをうるおし細い山路に入つていく。今日は夏祭りらしく丁燈や神社ののぼりが目につく。こののどかな景色をかき消すかのようにものすごい雷雨である。はじめの内は涼しいからといつて歩いていたがたまらなくなり、農家で雨やどりをさせてもらう。キューリとあめでお茶をごちそうになる。毎度思うことだが木曾のキューリはすごくおいしい。こゝのおばさんの話ではこの家が最後でこの先は家がなく本当の山路だからちやんと雨をやましてから行けというので一時間程おしやべりをしてから出発した。

雨上りの涼しい山路を元気に登る。

五時二〇分馬籠峠着。こゝらはもう長野県もはずれで岐阜県に接している。途中一人のお婆さんに会う。このお婆さんがいうには、この辺は中津川市合併賛成反対でもめていてこの両者は口もきかないということだ。そしてこのお婆さんの家には「中津川市合併賛成の家」という赤い札がはつてある。仲々いかめしいものだ。

三〇分を歩いたろうか。いよいよ馬籠である。今晩の寝る所を捜していると、一人のお婆さんがこの部落の寄合所を貸してくれた。私達はほつとして夕食の仕度にとりかかつた。今晩はカレーライスである。ところが不覚にもきたないから使わないようにといわれた方のなべで作つてしまつた。それでもワンゲルの合言葉「気にしない」を連発しあつて目をつぶつて食べた。でも仲々おいしかつた。

九時ちよつと前、お婆さん達が四人遊びに来た。ジャガイモとあめをもつて来てくれ、私達のクラッカーと紅茶をごちそうしたが紅茶には全く笑つてしまつた。

「これは何ぞい。どえらい色をしているけん、こんなものいらんわい」と言う。どうやらゲンノショウコと間違えているようだ。いや全く素朴である。話は藤村先生の自慢と例の合併の問題である。このお婆さんの話では、反対が当り前で賛成する人は悪い人ばつかりであるという。いやどちらも皆、木曾の人はいゝ人ばかりである。十時ころ村の若い衆が六人遊びに来て、歌つたり、話したりして、十時半、やつと就寝する。

二十四日

六時三〇分起床

七時ごろ昨日のお婆さんがたくわんを持つて来てくれた。十分程たつと又別のお婆さんが同じようにたくわんを持つて来てくれた。私達はどちらもありがたくちようだいした。八時ごろ荷物の整理をしていると今度は沢たもちを持つて来てくれて、今晩は又皆で遊びに来てやるからもう一晩遊んで行けという。私達もこの馬籠が気にいつてしまつたので泊ることにした。

十時、こゝからすぐ近くにある島崎藤村の記念堂を見学する。この記念堂は旧本陣跡にたてられてあり、この中には藤村の書簡類や蔵書があり一見する価値がある。

この後永昌寺へ行く、このお寺は小説「夜明け前」に出てくる万福寺のモデルである。こゝには藤村の家族のお墓がある。お恥ずかしいことだが、こゝに来て藤村の本名が春樹であると知つた。こうなると菊田一夫も古いものだねといつて大笑いをした。

午后もぶらぶら散歩したり洗たくしたりしてすごす。

八時頃、カ取線香をたいて寝ころがつて歌をうたつていると昨日の若い衆が遊びに来た。十時ごろまで話をしていつて、今日は永昌寺で盆踊りがあるといつて出掛けていつた。木曾節のいゝのを聞かせるから一緒に行こうといつたが、明日は早く立たねばならぬので早く寝ることにした。

二十五日

八時、馬籠を出発する。

一時間程歩くと新茶屋につく。ここには芭蕉の「送られつ送りつ果は木曾の秋」という石碑がある。はるか下の方には中津川の町が見える。少しはなれた所に「是より北木曾路、藤村老人」と記した碑があるがここに立つて後の山道を眺めると木曾を通つて来たという感じがせまつてくる。しばらく歩くと、田中山道の最後の十曲峠にさしかかる。ここの山路はきれいに石畳が敷いてある。木立の陰は涼しいし、道は歩きよいし快適である。医王寺という寺で小休して一時間余り炎天下を歩いて十二時半中津川駅に着く。こゝから大井まで汽車にのり大井からバスで恵那狭を見物に出掛ける。三時半、恵那狭着

こゝまで来ると同じ木曾川でも川幅は広く湖の様な感じで、ボートや遊覧船等が浮んでいる。何となく都会めいた感じにがつかりしそれに炎天下を歩いたせいか、ひどく疲れたので見物する気にもなれず木蔭でうとうと始めてしまつた。目が覚めてみると五時である。バスに大急ぎでとび乗りとんだ恵那狭見物であつた。

五時五十五分　名古屋行列車に乗る。

途中日本ライン寄つた、舟で木曾川下りをするつもりであつたがこうやつて名古屋行列車に落ちついてしまうと、むしように家に帰りたくなつた。それで日本ラインを下りをあきらめて名古屋まで乗ることにした。

名古屋着　午後八時名古屋で三時間程時間があるので、町を見物することにした。駅の前に大きな噴水があつて多勢の人達が夏の涼味を求めて、その周りで涼んでいる。

この後、私達は土産物を買い十一時、汽車に乗る。

以上が私達の生まれてはじめての毛色の変つた旅行である。心細い事、不安な事も数多くあつたが、でも非常に楽しい旅であつた。木曾川の美しい流れ、それを静かに囲んでいる山々等。自然の深さにひかれそれにもまして山国の人々の人情等が忘れ難く今も頭に思い浮かべている。

尾瀬歩き

参加人員　三十四名

チーフリーダー　嘉納秀明

第一班
リーダー　望月元雄
藤林　徹　斎藤　隆　佐藤文雄
大串　兎紀夫　永田克巳

第二班
リーダー　田上栄一
岸本三男　塚原伸一郎　栗田武寿郎
江崎伴雄　白井信行　井上藤

第三班
リーダー　松本正雄
米屋勝利　斎藤大樹　高橋俊吾
渡辺一良　渡辺事英　加茂博夫

第四班
リーダー　藤岡暉生
吉野大次郎　三神広臣　美馬宏三
石田陽子　諸節紀代子

第五班
リーダー　岩村美智子
倉田郁代　荻野高子　宮崎裕子
田中康子　鍋柄栄子　甘粕佐紀子

コースタイム

5月30日
19:00　上野発
22:35　沼田着

5月31日
1:15　沼田発
3:15　富士見下発
5:30　富士見小屋着
6:35　〃　発
7:00　アヤメ平着
7:45　〃　発
10:50　山の鼻TS
13:05　至仏山へ
15:45　TS着

6月1日
8:30　TS発

8:30　竜宮小屋着
9:00　〃　発
9:25　原小屋着
10:00　〃　発
11:10　三条の滝着
11:30　〃　発
12:30　原小屋着
13:50　〃　発
14:50　沼尻小屋
16:42　長蔵小屋

6月2日
長蔵小屋発
三平峠
大清水着
沼田着

このワンゲル始つて以来初めてという大パーティ三十四名で行つた五月三十日から六月二日までの三日間にわたる尾瀬ワンダリングが一人の事故者も出さずに無事終え得た事は、かなりの成功だつたといえよう。しかしながら、六月一日の我が大学創立記念日と、二日の運動会を無視し、遠挙のために一部の上級生が先に帰るという企画は、少し冒険であつたと思われる。

このワンダリングでは、大部分の一年生にとつて初めてのテント生活であつた。次の紀行文はこの新人部員の筆によるものである

五月三十日（土）

午後四時上野駅集合。別に並ばなくても良いのだと聞いて「何のために」こんなに早く全員を集めたのだ。とちよつと憤慨する。それでもダベッたり、新聞、雑誌類を読んだりしているうちにどうやら出発の七時になつた。列車が出発してからも女性軍、トランプを囲んだはいいが、意心に遠つて大はしやぎ。まあそれも結構だが、いつまでも子供ではないのだから少しぐらい他人の迷惑も考えるべきではなかつたか。（イヤ失礼シマシタ。）沼田に着くとまだバスが出るまでには二時間半以上あると聞いて再びガッカリした。パッキングに一苦労した後、それぞれ自分のリュックの重量を測つてみる。

十三Kg以下のものから二十三Kgまでさまざまであつたがある程度均等になるように再びパックをする。

五月三十一日

バスが出ると、さすがに疲れが出たのかウトウトする者もかなりいたが、それでも元気の良い若者連はひどいローリングの中で合唱（雑唱）を楽しんでいた。富士見下に着きバスを下りると、体を動かさないと寒さが身にしみる程なので、懐電を出しただけですぐに出発する。

まだあたりは真暗だが天気は良く〝星も泣いていた〟ようだ。懐電の光を頼りに歩を進めるうちにだんだん空も白みはじめ、お互にねぼけずらがはっきりと見えるようになった。バラ色に焼けた空には、ほとんど雲もなく、今日はさぞかし良い天気になるだろうと思われた。道は緩く、広い登り道で、ところどころで雪にもお目にかかれた。体のコンディションが良くない為か、富士見小屋に着いた頃にはかなりバテた者もおり、ここで朝食となった。

一時間程後出発し、あちこちに水たまりのある湿地帯を飛び越えたり、ケマザサをかき分けたりの難行を続けると、途中から今年になって出来たのだろうと思われる材木道となった。左方から冷たい風が吹きつけて、歩いていないとガタが来るようだった。出発後三十分程でアヤメ平に着いた。海抜二千米近くの所にこんな湿地帯があるとは全く驚いた。

水でグッショリ濡らした蒲団の上でも歩けばこんなふうかと思われるが、何しろ一歩歩くごとにくるぶし附近まで水中に没する。しかし水芭蕉が咲き乱れ、あちこちに紺碧の空を反映する池があり、雪を頂いた燧岳、至仏山　諸々の山を仰ぎ見られるこのアヤメ平は全く地上のパラダイスのようだ。衣食住の不便という事を考えなければこんな所に一人で（二人の方が Better）一生暮らすのも悪くないなどとかってな事を考えてみる。いや一生暮らさないまでも二人ずれで再来する価値大いにありと見た。

〝なごりはつきねど〟時間はつれなく過ぎるので記念撮影の後、このアヤメ平を後に

する。道は途中で材木もなくなってしまったので、へまをやると足首までズブリといきそうなところをあちこちによけながら下る。その為一Km歩くのに一時間もかかる始末。途中何度も休みながら（雪を食い食い）三時間半ばかりかけて、テント設営予定地の川上川のほとりにたどり着いた。さつそくもたもたと疲れた体でテントをぶったてて、昼食とする。昼食後、三年生のほとんどと希望者が夕食の為の食当として残留し他は至仏をめがける。しかし時間的制約があるのではじめから途中で引き返す予定であった。その為か、皆あまりファイトがなくあちこちでエンコしてしまう。僕を含めた三、四人も尾瀬原全体の眺められる、少しばかり残雪があった所で、もはやこれまでと決める。あとはピッケルはなかったがグリセード（シリセード）のまねごとをしたり、ダベリングで時間をつぶし、雨がショボつき出した頃に退却とした。夕食後雨もあがったので名ばかりのキャンプファイアを焚き、一応全員が火へとり囲んだものの歌を知らぬ者が多かった為か、さっぱり声が出なかった。七時頃テントにもぐり込むとすぐに二日分の深い眠りに落ちて行った。外では三年生が明日の計画について議論をたたかわせていたらしいが：：：。

（江崎）

一九五九　六　一　山の鼻　一原の小屋

寝て、目が覚めたら、もう朝だった。山の夜は、随分寝た様に思われても五分か十分しか寝ていないものだ。寒と人から聞いていただけに、あっけなく、山の夜程、短かい夜は無いと思った。テントの寝心地も、非常に良かった。うすぼんやりした気持で朝食をとり、七時一寸過ぎに、山の鼻キャンプ場を出発。道端に、気品ありげに頭をもたげて、紫色のジラネアオイが咲いていた。土の道を少し行くと、シソカバの木の敷いてある尾瀬ケ原に入る。初めてのワラジの履心地は、庭の植木を一本とり去った時の様にスカットした軽快さで、スタ、ス

タと歩く。途中川が右つた。どなたか、川にういている丸木に乗ろうとしてすべり、川に落ちたりしていた。日の光も余り強く無く、のんびりした日和だつた。岸辺には一きわ群をなした水芭蕉が咲いていた。

今日からは夏、〝夏がくれば思いだす：：もなんとなく口ずさみたい様な日だつた。部室で練習した歌を上手(?)にハモらせて、じゆくじゆくと草の上を行つた。竜宮小屋の近くで大休止をとつた。そこは、土も硬く、文学少女が見たら泣き出したくなる様な〝筆リンドウ〟が何とも言えない哀愁を漂よわしていた。「この葉つぱが食べられたらなあー」と言わずにいられない程、大きなはつぱの水芭蕉：：：。小さかい黄い花のリユウキンカ：：：。やつぱりこの季節に来てよかつた。

竜宮小屋からは、少し硬みを帯びた道だつた。

丁度、木の上を歩くのが、いやになつた頃原の小屋についた。

ここで横浜から預つて来た手紙と写真を小屋の小父さんに手渡す。昼食と雨具を持つて今度は三条の滝へ行くわけである。

すつかりわらじが気に入つてしまつた私達は靴にはき変えずそのまゝで予備にもう一足腰につるして出かける。柔かい黄みどり色に明るく輝く眺めは一幅の油彩画としてすばらしい詩趣をそそり、今更に湿原の美に魅せられる。程なく硫黄の匂いが鼻を衝いて温泉小屋が左側に見える。茅葺屋根の親しみのある小屋である。いよいよ三条の滝、林道も昼なお暗く、落葉で敷きつめられている。歩くたびにがさがさという音がおもしろい。荷物がないので文句なしに身軽に歩ける。走つてると言つた方が適当かも知れない。だから後の人達は少しも追いついて来ない。只見川の沢音が近ずいてくるにつれ道も木の根が四方八方にはり急傾斜になる。木の根を力に伝わる程に遙か脚下に白い泡を噴いて走る平滑の滝が見下される。なお尾根をずんずん進んで行く。

全然人に会わない。自分達のパーティーだけがこの林道に入つているのだと思うと一層たのもしい。非常に歩きにくい道をたどりつく到々十一時に三条の滝に到着。あまりにも素晴らしい景観に言かされるばかりだ。よくもこんなに静閑とした山おくに雄大な力強さを強調しているかの如き滝があつたものだ。実に感嘆久しいものがある。これこそ尾瀬のとつておきの真座敷であろう。滝壺までロープが渡してある。皆空身となり下り始めた。頼りとなるのはこの綱一本、真剣そのものである。しかし一部の人しか下らないうちに空が真つ暗になり雨が落ちて来た。仕方なしに断念して帰ることにする。昼食は小屋へ帰つてからだという。雨の中を空腹で歩くのはとてもひもじい。朝が早かつたので余計に感ずる。レインコートを着るととても歩きにくい。往きとちがつて歩調もゆるみ雨の為足もとが悪くすぐにすべりそうになる。ようやく温泉小屋にさしかかつた頃より雨もすつかり止み、一気に原小屋へと急ぐ。熱い紅茶のおいしかつた事と言つたら筆舌につくしがたい。

これから原小屋を出て沼に向う。雨は依然として降つている。原の明るさから樹間の薄暗い道に入る。こゝもまつたく道が悪いぬかるみの上に木が渡してあるがともすれば足を踏み外し勝になる。皆むつつりと歩く。なにかにせき立てられているかの様だ。苦労して山などにどうして登るか？と尋ねる様な人なら　重い荷物にあえぎ午ら丸太の上をよろよろ歩いて行くしかめつらをした行列をみたらどんなにか抱腹するだろう。まだかまだかと思つても仲々沼につかない。やつと前方が明るくなりとろんと眠つた様な沼が姿を現わす。それは原の天真　漫な明るさとは対称的な深い孤独に包まれているようだ。ここより長蔵小屋まで船に乗る。ガスつていて船上よりの展望皆無。エンジンの音が湖上に反響して森厳な静寂を破る。ここで長蔵小屋泊りとアント

に分れる。自分はテント組となりじめじめした樹間にテントを拡げる。その晩は半分の人数が小屋に移つた為たつぷりとテントの中にシラフをのばすことが出来た。昨晩大人満員のテントからけとばされて朝つめたい河原で目を覚ましたのと比べてまさに雲泥の差である。夕食は小屋に出張する。すすでいぶせ返つた小屋の食堂でランプの薄暗い炎を囲んでがつがつと空つ腹にメシを詰めこむ図はまつたく異様なまで人間の動物的本能を表わしている虚偽に満ちた都会生活では観察できぬ所である。だがこれが当然なのかもしれない。街の

煙や俗世間の煩わしさから逃れたこのような所でこそ人間は本来の姿に帰るのかもしれぬ。それだけ自然に近づくともいえる。だから山に来てまで詰らなく気取つたりすることは実際馬鹿げた事だ。一日中歩き通り熱い飯をふうふうと息づかいも荒く大盛でぎる者はなんと健康な事だ。その晩は互に助手な事をしやべつたり、又食つたり最後に歌をうたつたりあらぬ気勢を上げる。熱騰す。

2日。帰京のみの日程のため比較的寝坊する。しつこい雨の中を尾瀬沼を後にする峠のあたりから雨もやみ、どろんこの道を最高速度でとばす。途中沼を目指して登る何パーティーと擦違う。我々の厳正なる統計をもつてするとパーティー構成は大体二対一で女性の方が多い。尾瀬位女性の多い山は他にない様だ。この辺に尾瀬の魅力があるのかもしれぬ。大清水からバスで沼田にもどる。

（斎藤）

一応無事に楽しめた尾瀬ワングリングであつたが、後々の為にも、ここで後日開かれた反省会から幾つかの意見を拾つてみる必要があると思う。

一番問題となつたのはリーダーに関する事で、多種多様の意見が出たが、まとめると次の事に原因する。即ち、これまでの部活動が小グループのみで行なわれ大パーティー指導の経験がなかつた事と、下級生の体力、意志をはつきりつかめなかつた事である。このためキャンプファイヤーに於ても親睦の点で不満足なものになつてしまいました。

次にあげられたのが企画の不充分だつた点で、食料については、出発の日十六時に集合してからあくる日の朝六時まで食事に関して何の用意をも注意しなかつた事と、後半副食が少くなり、帰りの汽車では殆んどなしで米ばかり食べなくてはならなかつた事などである。その他に至仏山に登れなかつた事を不満に思う者や、体力別にパーティーを分ける必要を感じた者も多かつた。しかしいつも企画通りに行くものではない。雨にもそれ程悩まされず予定のコースを踏めた事は、成功だつたと言えよう。

弘明堂書店
国大工学部前
TEL (三) 四七二三

次号

原稿募集

一般締切り 三十五年一月
ワンダーフォーゲル部
スカイライン編集係

お国自慢

今はこうして北は北海道から南は九州まで、いろいろな国の人が同じ都会のこの学園で日々勉学にいそしんでいる。ふと目蓋に浮んでくるものは「兎追いしあの山、小鮒つりし彼の川」、幼き日の思い出をつくり出してくれた我がふるさと、ふるさとは我々学生の心の泉です。そこには父母がいる。頑固なおじいさん、口やかましいおばあさん、姉もいる、兄も妹も又友人も〻遠くにありて思うものとはいいながら、郷愁を抑へきれず年幾度かふるさとのあの安らぎを求めて帰省してゆくのである。

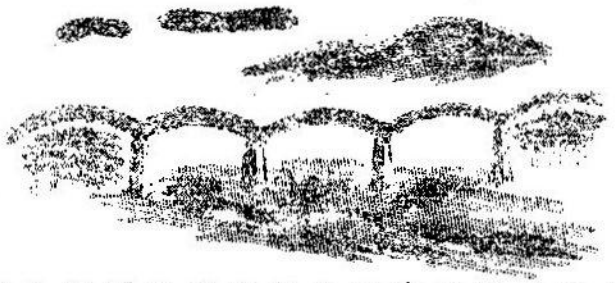
今回より本誌もその地方出身者のお国自慢を御披露しよう。

岩国の巻

工二　米屋勝利

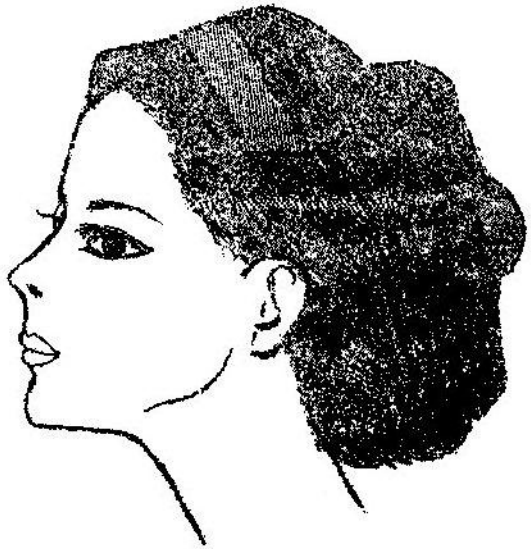
準平原中国山脈の西の端あたりに冠山、羅漢山という山がある。これらの山々から端を発し流れ落ちてくる水が山を下り、谷を走り支流を合流して瀬戸内海に注ぐ錦川山陽本線下り。列車が広島を過ぎて、隠かな瀬戸内海を左に見ながら、三・四〇分ゆくと左手前方に煙突の立ち並んだ工場地帯が目に入ってくる。これが先程の錦川の河口に開けた工業都市、岩国である。私はいつも帰省の列車が広島を過ぎると初めて「アヽやっと帰ったか」とホッとする。現在錦川は総合開発の一環に加えられ、上流の河山鉱山と工場地帯を結ぶ岩日線の新設鉄道建設工事も着々と進んで町も整理され前途有望な工業都市として、将来を約束されている。現在も市人、東洋紡の繊維会社、三井石油化学、興亜石油といった石油会社等大会社のずらりとならんだ様は、まさに青年期の工業都市としての活気が漲ぎつている。この工業都市岩国からバスで西へ十五分、ここが私のふるさとの町、城下町としての静かな岩国である。工業都市としての岩国、城下町としての岩国は、新旧の時代的好対照をなして同じ錦川の流れにはぐくまれて育つて来た。私の町は西に城山、南に愛宕山、北に伊勢ヵ丘をもち、東に開けている静かな美しい町、錦川はその間を縫つて東へ流れ、その川には城山を背景に五つの弧を描いた世界にも例を見ない奇橋、錦帯橋がかゝつている。今を去る事、二百八十有余年、徳川時代、岩国は大名吉川六万石の下に栄えていた。錦帯橋はこの三代広嘉公によるもので、両岸に接する二つの橋には橋脚があるが中央の三つには全然橋脚がない。これは放物線の力学を応用し、重力が加わるとひきしめる様になつているのだ。この橋はまだ記憶に新らしい昭和二十五年キジア台風によつて流失したがまもなく再建され、元の美しい姿を錦川の清流に映している。毎年夏になると、この橋の下で鵜飼が開かれる。鼠形船にのつて水銀灯に輝く錦帯橋を眺めながら、鮎をつまみ、酒を杯するのも又風流なもの、八月中旬、そのしもの川原での恒例の盆踊りは真に盛大である。称して近県盆踊り大会、東は岡山、鳥取から、南の四国まで、近県の有名なチームが集い、阿波踊りも賑やかに、夜の更けるのも忘れて踊り明かす。こういう所に田舎の快い情趣が漂ちあふれている。錦帯橋を渡つた所に母校岩国学校がある。附近一帯は吉川家臣数その他の旧家名門がずらりと軒並みを揃え、まさに昔の城下町を再現している。この辺一帯が桜の名所、吉香公園である。お堀に並ぶ桜〻附近には岩国の三百年の歴史を秘めた微古館もある。桜といえば錦帯橋畔の桜の美しさ

は一寸この都会ではみられない。錦川の清流に映る桜に包囲された錦帯橋を眺めながら飲む酒は又格別なもの（未経験）秋の紅葉、冬の雪景色四季折々の風情をかもし出してくれる錦川、独歩の小説の舞台に好んで用いられたのも無理からぬ事である。私は子供の頃川舟を漕いで兄等とこの川を上つて鮎やうなぎをとりにいつたことがあるハエナワ（俗名かもしれぬ）、うなぎ籠等を夕方しかけて翌朝揚げにゆく、夜風の寒さに身を震わせながら朝を待つた。この夜はとくに星が美しかつたと記憶している。収穫は少なかつたが、私には忘れられない思い出の一つである。夏泳ぎにゆくのもこの錦川である。一日に三度（朝昼晩）泳ぎにゆく事も少くない。錦川は私の心に楽しい、美しい思い出を刻み込んでくれた。木村：：氏の随筆の一節に「子供に都会と田舎とどちらがいい、と聞くと田舎がいいという。どうしてときくと田舎の川にはえびがいるからといつた」とある。私ならうなぎがいるからと答へるであろう。これは何もうなぎだけを意味するものではない。うなぎをも含めた、思い出の舞台としてのふるさとの風土、そこに私の求めるものがあるのである。ラジオ番組なつかしのメロディ　で流れてくる「美しき天然」もそんな所から生れたのであろう。この曲こそ私にとつては本当のなつかしのメロディである岩国港からポンポン船で沖へ三十分、阿多多島という小島がある。夏はカツパ共が群がる。白い砂浜、澄きつた海水、都会のそれには見る事の出来ぬ自然の美しさ、この海水浴場を裏へ半里廻わると、漁舟のちらほら見える静かな入江がある。ここから少し歩いた所、ここは小魚の天国だ。水中にもぐると海草がゆらゆら揺れる中をベラ、チヌ鯛：：の魚が愉快そうに泳いでゆく。時々たこも顔を出す。正に天然水族館である。ここでキャンプをすればおかずには不足しない。これは経験済みで保証する。でも自分でとるのだが、あまり魚ばかり食



べていると顔が魚に似てくるというので、あまり長くキャンプも出来ぬ。この沖でよく鯛網が行われる。私は一度ポンポン船でこの鯛網を見にいつた事がある。小規模で四、五隻の小漁船が網をおろしてまわりを開き、初めて荒い目の網で追込み、まわりを狭めてとりあげるのだ。彼らは自らの歌に合せながら仕事してゆく。私は海の潮風にあたりながら眺める、気分のいいものです。このとり上げた鯛を買つて食べた。廣つても鯛、というがやはり新鮮な鯛の味は格別なもの。又私達若い連中は正月元旦には初日を見に朝早くから伊勢ガ丘に出かけてゆく。オーバーにマフラーを巻きつけて、寒い冬の家々の間を通り、山合を縫い、伊勢ガ丘に立つと、東の空がほんのり赤らんでくる。この時初めて新年になつたのだなあ、という気持が胸一杯に浸み通つてきて、この瞬間、これからの一年が透してみえる様だ。

この様に私は山紫水明の地岩国のこの生活様式の中で、いろいろな事を経験し育つて来た。それが今では皆んな美しい思い出となつて脳裏に浮んで来ます。要するに錦帯橋、国際空港、白蛇もさる事ながら最も私が皆様に紹介したいのは城山のもと、錦川の流れ、瀬戸内海の海岸地帯特有の温和で多彩な自然と、その間に織りなした美しい人情と、豊かな自由の空気である。そういつたものの中にふるさとはいいなあ、という私の真の気持が潜んでいるのである。



着物を脱げと云うのかい

佐藤文雄

「あの女の顔は、着物を脱げというのかい？　脱ぎやいゝんだろう　と言っている顔だ」ってマルローさんが、ゴアの有名な裸体画「マヤ」について言つたとかいう言葉だそうです。

それにしてもルネッサンスの芸術なんて、裸のオンパレードですね。どうしてあんなに脱がせちゃつたんでしょう。かわいそうじゃありませんか、寒いでしょうに：：それにこの頃の映画でも女優さんを脱がせつちゃうんですつてね。グラマーつて言うんだそうですが。日本のルネッサンス来る〻なんて映画界のお偉方は思つているのでしょう。

大体着飾つたり、公の場所で裸になつた女の人なんか、人だなんて思えません、まして女性であるなどとは：：見栄の権化が、動物ぐらいにしか見えないんじゃないでしょうか。

「そうですな。石原裕次郎ですが：：」

「自分はグラマーにもカリブソにも色気を感じませんな。若い人がハダカになつても何ともない。視線がスクリーンから落ちるぐらいが関の山つてとこでしようか。自分は山田五十鈴さんのような人に「女」を感じます。」

（朝日新聞「話題の顔」より）

いやあ同感です。女の人ばかりでなく人間の美しさは、着物の内にあるもの、裸の内にあるもの、だと思います。

さて女三人寄れば何とやら。特に学校帰りの女学生は大変お眼やかなことです。ところが先日神田へ本を買いに行つた帰り途、不幸にも女学生の遠足のような電車に乗り合せてしまいました。

○「あんた手を見せて。ウアー〻あんた美人じゃないわね」

×「まあ失礼ね。顔を見てから言つて頂戴〻」

「ハハ、、、、、」

○「平気よ。あたしも美人じゃないもの。ほらこんなに長いでしよ」

「ハハ、、、、、」

と言つて手の掌の生命線を追つて手の甲までたどる仕草をしていました。

まことにお眼やかなことでした。

これは上高地に行つている時に知つたのですが、児島明子さんがミス・ユニバースに選ばれたそうですね。誠に日本の全女性のためにお祝い申上げます。

さて今度は男三人寄ればいつもやることですが、この美人コンテストは明治四十一年二月二十九日に、福沢諭吉さんの時事新報が全国より美人の写真を募集してその審査の結果を発表したのが始めだ。なんてモノの本には書かれていますがこの始めての日本一の美人は

一位　末弘ひろ子

二位　金田けん子

三位　土屋のぶ子

の諸嬢だつたそうです。今生きておられたら七十前後の諸嬢さんつてとこでしようね。

愛想に娘は口へ袖をあて

牡丹刷毛だんだん鼻へ攻め寄せる

今日は屁理屈を述べることは野暮でしようから、粋な福沢さんに見習つて美人を鑑

賞するだけに留めましよう。

「美人トイウモ皮一重」

―終り―

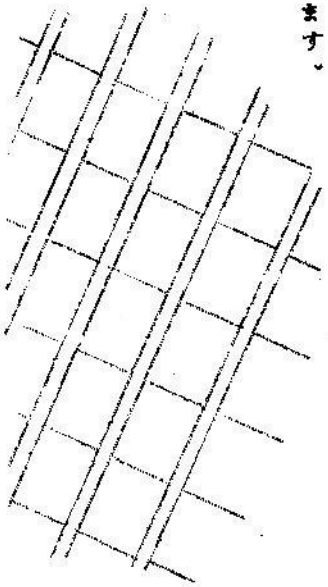
追記

先日見知らぬ女性より手紙を戴きまして「あなたの美人觀は幼稚である」と宣われました。まつたく一言もありません。そして「実際には、あなたの年代ではどのような女性を男性は好むか」などというむづかしい質問を受けましたが、私はその方のオーソレミオではありませんので何とも申し上げかねます。

たゞ、顔は二十代に作られ、三十から四十以降の顔は己に責任があると言われています。これは二十代に化粧法を覚えろとか、整形外科に行けとか言うのではもちろんなく、これに関しては今日の雑文に記しておきましたからお分りかと思います。

要するに孤独を愛し、しかし人間嫌いになることなく、瞬時の現在ばかりでなく未来をも信ずることのできるようになさつて下さい。それに「恋（恋愛でなく）をなさい」とお勧めします。

また幼稚な説法で誠に申訳ございませんが誌上を借りてお答えさせて戴きます。それと同時に「まことの美」とか「壮大の美」など種々と書きたかつたのですが、私にそれだけの力量がないことを知り、また美は言われるものではなく思う（見る）ことであることを痛切に感じましたので、この駄文を今回を以て終らせて戴きます。長い間御愛読またあちこちから御批判や話題をお寄せ下さいましたことを厚くお礼申上げます。



裏銀座縦走

経三　松本正雄

	乗越着	15.55	8日	上野発
	〃発	16.10	9日	弥ケ原発 10.00
	雷鳥沢着	16.30		天狗平 13.45
18日	起床	5.40		雷鳥沢 16.30
	出発	8.00	10日	雨の為停滞
	一越	10.15	11日	〃
	浄土	11.15	12日	曇後雨
	昼食			雷鳥沢発 8.10
	鬼岳	12.45		別山乗越 9.10
	獅子岳	14.00		剣山荘 10.10
	ザラ峠	14.40		一服剣 10.30
	五色ケ原	15.20		前剣 11.15
14日	雨の為停滞			避難小屋 11.50
15日	曇時々雨			昼食
	起床	5.00		避難小屋発 12.30
	出発	7.00		剣山頂着 12.50
	越中沢岳	9.45		〃発 13.10
	乗越着	11.45		小屋 13.30

	出発	7.15		昼食
	前山	8.15		乗越発 13.00
	北薬師	9.50		小屋着 13.10
	薬師岳山頂	10.50		〃発 15.00
	薬師岳発	11.40		TS 15.20
	薬師沢出合	12.30	17日	小雨後曇時々晴
	太郎兵衛平	13.40		起床 5.40
	上ノ岳	15.15		出発 7.50
18日	起床	5.30		上俣岳 8.50
	出発	7.00		赤城 9.20
	モミ沢	7.30		黒部五郎着 11.50
	西鎌尾根入り	9.45		昼食
	湯俣分岐	10.30		黒部五郎発 13.15
	槍ケ岳肩着	11.30		雪渓下 14.15
	槍ケ岳肩発	12.50		黒部乗越 14.45
	槍沢	14.45		三俣 華部 16.20
	一俣	15.15		〃 頂上 17.30
	横尾	15.55		双六池 19.00
	徳沢BC	16.25	16日	起床 5.40
				7.15

七月八日　剣―槍縦走は昨年から計画し時にふれ地図を拡げて楽しみにしていたコースである。数年前までは小屋も整備されていず年に二〇パーナイ程しか通らないと云われていた。現在は相当賑やかで剣―笠ケ岳等も取られている。一年生連の差入れでふくらんだザックは松本十二貫、高橋　斎藤各十貫とぐーんと肩に喰い込む。上野駅に江崎、望月、渡辺等の見送りを受け急行北陸に乗りこむ。山行に急行など我々の生活水準から見れば勿体ないが翌朝九時半には立山弥　ケ原に立てる便宜さにはかなわない。愈々合宿を含め約二〇日間の山どもりである。

九日　立山へは乗物の連続で来年は地獄谷までバス乗入れといい、その内上高地以上の眼わいを見せることだろう。弥　ケ原より天狗平迄行くタクシーの後塵を浴びてテクり始める。途中近道と称する道へ新道からはずれていく。処がその道たるや沢をつめていく道でトレースはあつても倒木やカン木にさえぎられ荷物は傾き歩き辛いことこの上ない。

漸くにして天狗平へ出る。ここから見る立山剣岳の景色は一望のもとに見られすばらしい。やがて地獄谷へ雪渓を越して近道をして行く。大雪山の地獄焼や登別の地獄谷と同様平凡。雷鳥沢は四囲に拡大な雪渓が有り、夏スキーを楽しむ人達で眼わいを見せる。

十日　昨夕、夜中から降り出した雨は降り止まず。ダンボールの箱に囲まれ終日三人共オジヤを食べ乍ら寝て暮し、ガスの為視界零。小雨の際にグリセードをして楽しむ。

十一日　希望的観測にも拘らず、昨夜は暴風雨に見舞われ、支柱は風にふくらんだテントを支え終夜物音絶えない。よく耐えていたが、未明には雨もり激しく、我々が手で支えていたのも何のその遂に支柱が折れ、同時に下と上からザーッと流れ込む雨に悩まされる。五時迄頑張り通したが、意

を決して強風雨の中を雷鳥荘に荷物を運び込み、衣類を乾すことにした。あちこちのテントも支柱が折れ為す処なく避難してきた。小屋できくと数年来ない強風と云い、前線が又梅雨型に戻つたらしい。トランジスターは各地の山も荒れ上高地連絶途絶えるの報有り。前途多難を思わす。終日乾燥室に閉じこもり、頭がおかしくなる。食糧計画をやり直し十五日間にもし合宿のパーティが入らなければ徳本峠越えで、帰れるの見通し立つ。

十二日　朝方太陽が顔をみせたり隠したりなので、剣往復に出掛ける。某山岳会の河端さんと連れ立ち、別山乗越までいく。剣山荘位までは後立山連峰が、見えつかくれつしていたが、その内ガスつてきて平蔵あたりでは何も見えず、カニの横ばいあたりも谷を見下ろすこともできない。山頂視界零。早々に引き返えしたが、途中雨激しく岩が濡れて少々困まり、うまくすると平蔵の雪渓を下ろうと思つても下が見えない。漸く剣御前まで帰つてきたが、疲れ迄ぐつしよりとぬれてしまう。山頂を踏んだのみ。

十三日　停滞が続き先の見通しが立たず立山三山も雷鳥荘には宗教信仰の為に老若男女が、大挙して登つたり、山容も見えず失望したので、今日は一ノ越経由で五色へ行くことにする。右に室堂を見ながら一ノ越へ出る。二時間程雪渓を黙々と登り、小屋より相当五色寄りにルートを求めていく。五色迄遂に一人も同コースの人に会わない。浄土の富山大学研究所で昼食。ここは富山大のワンゲルが管理している小屋で、お茶をごちそうして貰う。毎年三百貫以上の荷物を一年生が担つて七月中旬頃より開いているそうだ。こんな立派な小屋が我が部にも欲しいとつくづく思う。たまに竜王を見乍ら下る。獅子ケ岳あたりから又もや雨となり道もガレ場の連続で全く閉口する鬼岳へかゝる頃雪渓の下りで高橋足をすべらしもう少しで谷底へお　仏し、天国で会わねばならなくなりかける。ザラ峠への下

りはガレ場の連絡で雨中四〇分下りに下つてザラ峠へ出る。ふらふら乍ら又登る。雨の中テント設営。五色小屋の娘さんは何だか我々にひどくなれなれしく設営場所を教えて呉れ、見送りまでひどく親切で気をよくする。シーズン早く忙しくないからかもしれぬ。

十四日　昨夕少しあがつた雨が又降り出し又もや停滞。滅ころんで終日歌を歌う。最後は知つている歌もなくなり疲れて寝こむ。

七月下旬から八月は高山植物が咲き揃う五色ケ原も未だシーズン至らず、人もまばらにわびしい限り。

十五日　曇の天気なれど仕方なく出発。鷲岳を越えて越中沢岳に至る。ここからは薬師を見乍らコースはぐつと西へ向く。有峰へ下る道筋がよく見える。スゴ頭からスゴ小屋はすぐ見えそこで昼食にしようとドンドンと下つた。道は全くひどくぬかるみと木の枝に悩まされる。下つていく内に、ふつと斎藤の姿が眼前から消えさつたと思うと「助けて呉れ」の悲鳴が聞え、ラストの自分は驚いて駆けつけると前にのめつてリュックの下敷きとなつた彼は、立ち上がれずバタバタしている。ひき起すと少しすりむき傷く。ショックの為休憩の後出発。昼前で疲れていたので乗越で昼食。いつもの通りカンパン・フランスパンにチーズ・バターぬりつけ、シロップで流し込む。ここから小屋までは今迄以上に悪路でドロドロの雪渓に足をすべらしズボンは泥だらけとなる。水不足の為小屋は茶代参拾円也を払つてお茶を飲むと全く生き返るようだ。雨が又激しく降り始めたので小屋のおじいさんと話し込んだ。立山と穂高のガイドの競争意識や薬師への最初のルート開拓など昔ガイドをしていた人だけに仲々面白い。雨ますます激しく何処かの会社の人達はテント持参し乍ら小屋へ泊る。我々は少し小やみになつた時小屋から少し上の平地でビバーク。正式のキャンプ指定地は間山にあり大きな雪田のもとにある。明大ワンゲルの四年生二人と二パーティしかなく、この人達とは三俣迄一緒に行をともにした。

十六日　天候依然恢復せず。ガスの中薬師山頂を目指す。ダラダラした長い登りである。二時間程登ると岩嶺が続く道となるガスが深い為北薬師をいつ越えたのかもはつきりしない。薬師山頂にたどりついた頃からガスが切れたりかゝつたりする。裏銀コース・槍の鎌尾根・三俣・黒部上流など実によく見えた。行手には五色ケ原よりも広く如何にも北アの高原である太郎ベエ平・雪田がきらきら輝く雲ノ平がよく見える下りはあつと云う間に下つてしまう。が薬師沢出合までは細い谷間を下つていくので余り歩き易くない。

太郎ベエの小屋は誰もいないらしく、老婆が一人出てきてこの一週間天候は全くはつきりせず晴天は一日もなかつたと話して呉れる。全くツカない縦走と慨嘆する。ビバーク点は太郎ベエからずつと上ノ岳へ寄り雪田のはしつこのハエ松の中に選ぶ。今年は例年の二倍以上も雪があり、ビバーク点には全く心配要らなかつた。設営と同時にいつもの通りまず暖かいミルクで元気を付ける。

十七日　黒部五郎岳の登りにかゝる迄は、起伏の大きくない道が続きいよいよ黒部山頂を望む。乗越の方から見るとぐーつときり立つた氷山の様な恰好をした山である。山頂で昼食。ここから下りには道が二つあつて、一つは山頂より右に下つた処からガレ場を下つていく道と一つは山頂を伝つて岩嶺を上り下りする道である。前者はガレのすごい道から急な斜面に槍沢大雪渓以上の大きな雪渓へ踏み入る。我々はこのルートを選びゆつくりと時間をかけて下つた。後で十年以上も北アに入つている人に聞くとこの二つのルートはガスとか雨の日にはこく遭難を起している悪路と聞いて驚いた下りきつた処である乗越は黒部源流の一をなす小川が流れ、イワナがよくつれるそう

である。以前小屋があつたので、柱が二・三本倒れていた。三俣の方からどこかの私立大学のワンゲルが二〇人程入つていて騒々しい。少々いや気がさして燕華へ向かうここの登りはハエ松やブツシユをこいでいく道で暑くてかなわない。雨が降つていたらさぞかし愚路となるだろうと思つた。

燕華の頂上から夕日に輝く鍬賀・赤岳・槍・穂高・常念・燕・が素晴らしく、カラーフイルムにおさめたいと思つた。尾根伝いに双六へ向かう中に日も暮れ、そぞろ肌寒くなつてくる。夜遅くなつてしまつて就寝十時。

十八日　ここまで来れば縦走も九分完了と今日は、合宿の連中に会えると心をはずます。最初の予定では南岳から横尾尾根を下る予定であつたが、停滞が多くて合宿に遅れたので下ることにする。槍の穂先から縦走路を眺みたいと考えていたのに、朝から小雨を交えたガスの中を西鎌を上る。昨年裏銀の時よりも何だかもつと長いように見え、行けども頂の場所さえ見えない。かなりバテてきた頃ふつと小屋が見えてきてホッとした。小屋で昼食をとつていると雨ますます激しく穂に上らず、そのまゝ一気に下ることにした。夏道は全くわからず雪渓とガスの中を坊主の岩小屋目指して駆け下りる。下からテレビ中継の荷をポッカしている人達に途中で会う。

雨もかなり上つてきた。横尾まで下つてきた時梓川の向う岸に田上・望月に似た人が居て手を振つているので慣てゝ大声で声を掛けて、行つて見ると人違いでがつかりする。

横尾のキャンプ地をくまなく探してもワンゲルのテントが見付からず、がつかりして座り込む。バス不通の為延期だなと考え、ともかく今夜は横尾にビバーク

して、食糧は喰い延ばしているから徳本峠越えで帰ろうと思案をして居ると、縦走中知り会つた人に上高地での連絡を頼んでありつた処から迎えに来て呉れた部員があり、ホッとした。徳沢園にたどりつき、皆に尽きせぬ話をする。佐渡ケ島一周から廻つて入つてきた吉田、不通等の事故にもめげずやつてきた部員を見ていると、各々たくましい仲間意識に懐しさで一杯であつた。リーダーナントに身を横たえた時には、又これから一週間ベースキャンプに過す楽しさで、このまゝ山にこもつてしまいたいと考えている内に眠り込んでしまつた。

リーダー　記録　松本正雄　経8
食糧　高橋俊吾　経1
設営　医薬　斎藤大樹　工1

屋久島

（藤林）

九州の南端大隅半島の佐多岬より四十粁南に浮ぶ低い丘陵より成る種ケ島。その南に高く海面より突きでた険峡な尾久島。この地形的に対象をなす二つの島は、海洋性文化の日本一の導入口として、西洋紀聞、采覧異言に見られるが、日本歴史の特異性と重要性を有している。海に幸を求め、海に支配される二万五千の屋久島の人々は、その年の幸を願つて俗称奥岳、千九百米の宮え浦岳に三日掛りでお参りをすると言う

垂直的気候変化に伴う植物の変化、山一帯を密林にする温帯多雨性の気候、雨明が十八米に及ぶウイルソン株、潮満ち来れば海底に沈むと言う海岸温泉。島の経済状態をそのまゝ示す営林署の勢力等々人間と自然との関係をはつきりと示してくれるであろう。一度この島に行つて見たいものです。

秘めごと

"私の秘めごと、父さまに
つげぐちする人、誰もいないよ"

これはロシア民謡「黒い瞳」の四番目に出てくる歌詞である。私はこの情熱的なジプシーの歌が大好きである。

人間には誰でも必ず秘めごとがあるそうだ。そうだと言うのは、私は今自分を見つめてみても秘めごとらしいものがなさそうだからだ。私は好奇心が強い。何でも知りたいと思う。

人と人との交りは虚偽があつてはならない。赤裸でいたいと思つていた。そこで自分というものが表現せず、よそよそしさでもつて自分の穴に閉じ込もつている人を見ると、その人の心の中に入つて秘密の扉を開いてみたくなる。しかし人には秘めごとがあるのだそうだ。その秘めごとを泥足で踏みつけたくなるのは、残念な仕打ちである。とある人は云う。そして社会に於いて、激しい戦いが自分を守る為には"仮面をかぶることが必要なのだと云う。たしかに、その必要もあるかも知れない。

私はそういう人から、自分の子供つぽい単純さを戒められた。私は社会人と学生とのちがいを、その時ざまざと見せつけられたような気がした。

私達学生生活を送つたものは、その間だけでも、社会人に必要な仮面をつけずに済んでいる。純粋な心をもつて社会を見ようとする努力をしている。

だが、どうぞ「若し貴方に愛する人が居たら、その最愛の人にだけは仮面をぬいで上げて下さい」と私はその人に云いたい。

（以久代）

表銀座縦走

工一　吉村元孝

29日快晴

中房温泉	8.20
合戦小屋着	12.05
〃　発	1.00
燕山荘着	1.40

30日　快晴

燕山荘	4.50
大天井ヒユツテ	7.25
西岳小屋	10.20
〃　発	10.40
昼　食	10.55
発	112.25
槍ケ岳山荘	2.30

31日　快晴

槍ケ岳山荘発	6.20
天狗原小口	18.00
南　岳	8.20
最底鞍部	10.00
中　食	10.30
2800m標高終	10.55
飛弾鳴　終	11.10
北穂小屋	12.30
発	1.30
涸沢乗越	8.30
穂高岳山荘	4.30

1日　晴時々曇

穂高岳山荘発	6.35
奥穂高岳	6.55
発	7.20
前穂高岳	8.20
発	9.15
岳沢ヒユツテ	11.30
発	12.10
上高地	2.20

八月も中旬を過ぎると、台風の影響か天気は余り良くない。二十八日朝起きると目も覚める程の晴天、急に登山欲がむらむらと湧き出し山行を決意、友人をさそつたが都合悪く一人で行く事にする。汽車が早かつたせいか松本駅に立つと登山者はほんの七、八人、シーズンの終りとはいえ、随分

少ないなあと、これからが思いやられる。駅で仮眠して、翌日有明に立つ。心配に反しかなりの登山客で、楽しそうにこれからの登山を語り合うパーティーがあちこち。天気は相変らず上々で、予定として大天井岳まで行く事にする。バスに揺られて一時間、中房温泉につく。ここは健黄明ジ泉といい胃腸、皮フ病に効くそうである。湯浴のお婆さんが、群れをなして？「一緒に風呂に入らんねえか」と年がいもなく云つていた。帰りには、よろしくと挨拶し、燕への登りとなる。合戦小屋まで三粁高さにして千米を登るのであるから、相当のアルバイトである。途中他のパーティと知り合いになり一緒に歩く。この中の一人、この途中でバテてしまい、少々ペースが狂い、燕への到着が少々おくれてしまつた。今日は彼らと行動を共にする事にし、燕山荘の泊りとする。

三十日朝三時五十分起床、四時半出発、小屋で知り合つた愛知大の人と二人で出発御来光を拝みながら、稜線をかけるように歩き始める。耳がいたくなる程風が強い。山の縁とは不思議なもので彼とは、小屋のロビーで一寸話し合つただけで話が合い、これからの行動を共にする事にしたのである。気がかりだつた台風も中国大陸へ去つてくれたので、安心して山に踏み込める。大天井も過ぎる頃になると風はおさまり、着換えをする。流石に銀座と称するだけあり道は最高で、まるで銀座の並木道が、山の尾根筋にあるといつた感じである。もつともこれは天気の好い時だけであろうが。

槍ケ岳を目の前にし、樅高連峰をオノで切り取つたような大キレット、なだらかな南岳を見、これからを楽しみにしながら西岳小屋につく。今日の泊りは槍の宿に決めたので、時間の余裕が充分あり、こゝで昼食をつくる事にする。昨晩たいておいた飯に醤油、塩、肉の罐詰、その他色々を投げ込みおじやを作る。冷たい時には全く強烈な味であり、まずいなんておだやかなものではない。犬の飯でもあんなひどくないだろう。なにしろ腹が減つては戦が出来ないので、熱くしてふうふう吹きながら黙つて飲みこむ。

西岳を過ぎると、水晶乗越までもつたいない位下る。これより東鎌尾根に入る。ちよこまかした登りを約二時間所にたどりつく。今は槍沢はほとんど雪が残つていない下の方に殺生小屋とヒユツテ大槍の盛根が赤く見える。暗によると、所は待遇が悪く下の方がずつと良いそうである。しかしこれから下へ下る気にもなれず明日の予定も考え、こゝで泊りとする。

三十一日五時起床、六時出発、小屋の前よりすぐ縦走路に入る。道は昨日とはすつかり変り完全なガレ道である。しかしこれが平らな所にあるのは仲々おつなもので、大変歩き良い。南岳までは楽な道で、樅高にある例の丸印の指導標について行けば一部を除き、迷いようがない道である。キレット入口に立ち前方を見ると北穂が立ちはだかつている。岩の殿堂穂高だけあり、この一般縦走路にしても全く急峻なもので、何処に取付きがあるのかと思われる程である。最初の難場キレットの下り、始めてなので注意深く下り、キレット鞍部に到る。「あつ」というまに降りてしまつたが二百米位はあるような断崖である。この辺で時間が早いが昨日の友人と一緒に食事を取る飯を食えば元気百倍、右手に切り込まれた滝谷、不気味な姿をたてて落ちて行く落石を耳にしながら北穂の取付きにかかる。二千八百米の標高の岩峰を過ぎ、一息入れ登り始める。槍の肩から続いている白ペンキの丸印はこの辺に来ると有難さが分つてくる。岩をよじ登り、上を眺めると指導標がはるか上の方まで続いている事は実に心強い。二、三の箇所を除き、案内書に云う程の難場らしい所もなく、予定通り北穂小屋につく。こゝは富士を除けば日本一高い山小屋だそうだが、それに比例してかお茶が高い。一パイ三十円である。

時間が充分あるので裏手にある北穂の頂上で昼寝し半刻ばかり楽しむ。北穂より唐沢岳までは、相変らず細い岩稜で、かなり緊張しながら涸沢岳に到る。こゝからはもう小屋も目の前でかける様に下り降りる。

一日五時起床六時半出発、朝起きるとガスがかゝつており視界が全然悪い。様子を見ていると、ガスも晴れて来そうなので思い切つて小屋を出る事にする。昨夜は小屋の泊りは十人ばかりで、内四人は前穂岳沢コースを取り、残りは涸沢を下るそうである。小屋から二十分もアルバイトすると、もう奥穂頂上である。強い風とガスをさけ、岩蔭にさけ、こゝであたりの景色を見る。西穂からジャンダルムまで、まるで手に取る様に見え、西穂にするか、前穂にするか随分迷つたが、懐の具合、体の調子、天候ですなおに釣尾根に向う。風が強く時々吹き飛ばされそうになり閉口したが、足場はよいし、前穂の頂上は目の前にあるので、一気に登り切る。頂上にはところせましとケルンが立ち並び、少々気になつたが槍の頂上のように鐵鎖の空鐘がないのには安心する。こゝからは涸沢、黒又白の岩場が手に取るように見え、目を移すと、徳沢園の赤い建物が見え、横尾の小屋も森の中にかすかに見える様な気がする。目を移せば目の前になだらかな大滝山、槍ヶ岳、特長ある常念岳、遠かかなたには南アルプス、八ヶ岳、富士、浅間連峰等が雲海の中に浮んでいる。この天望に未練を残し乍ら岳沢を下る。上高地からの穂高は、今登つて来たとは思われない様な遠い存在にも見え、なつかしくも思われる。又やつて来ようと秘かに心に誓い一路松本に向う。

和洋菓子と食料品

富士見家

TEL 雪の下岐れ道 二〇四八
大仏通り 二二一七
雪の下国大前（録倉） 二〇八八

奥日光

学一　平林茂

参加者　一年生部員

田中康子　江崎伴雄
鍋柄栄子　斎藤大樹
宮崎裕子　高橋俊吾
諸節紀代子　平林茂
横手敏江　渡辺事英

一九五九年八月三一日（月）

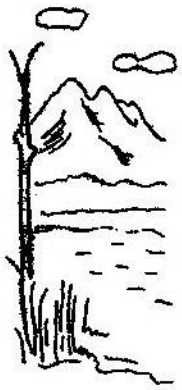
東京　曇　設営地湯元　晴

七・二五発上野　九・四五着日光

一一・四〇着湯元（バス）

一二・〇〇着湯元キャンプ場

既にシーズンオフなのであろう、湯元キャンプ場（一四八〇米）のバンガローは釘打され、テントの影もない。ザックを下し辺りを見廻す。ひどくは汚れていないがはえは親しげに集まつて来る。水道が引かれており、屋根の下にカマドが作られている。ちよつとがつかりであるが、手間は省けるから無理に原始生活を求めることもないであろう。この文明の利器の使用料及びショバ代が二〇円也である。



九月一日（火）　晴

四・〇起床　六・一〇発設営地

八・〇五着天　平八・五〇着前白根山

一〇・一〇着奥白根山（昼食）

一二・〇〇発奥白根山

一二・四〇着彌陀ヶ池
一三・四五着中ツ曾根降り口
一五・四〇着湯元

出発してから三〇分位でガレ場（大小の石がゴロゴロしていて登降するのにおつかない所を全て我々はこう呼ぶ）に懸る。傾斜は大分急である。家にいればまだ夢心地であろうに、汗をかき、あえぎあえぎ登る寝不足がたゝつて辛い。それでも空気はひんやりとし、日光は直射してないから何んとか持ち堪える。天狗平に着き、石油臭いポリタンの水をうまそうに飲む。

前白根山（二三七七）までは楽であつた風が冷く、岩がごつごつしており、すごい高山（まだ登つたことはないけど）の様な気分である。眼下には五色沼がどんよりとしている。これから登る奥白根山（二五七八）は目の前にあるが、まだ道程はありそうだ。強烈なガレ場が見え「まさかあれを登るのじやないだろうな」と不安になる。

しかし思つたより早く頂上に着いた。囲りには幾つもの岩の凸ばりと凹地がある。凹地の草の上で昼食を広げる。例によつて食パン、バター、チーズ、ミルクである。太陽はうららかに照つているが、じつとしているとさすがに寒さを感じ雨具を着込んだ。四人のパーティが登つてくる。互に声をかける。今日初めて会つた登山者である。案内書のコースタイムを大分詰めたのでしばらく休憩である。

山の間に水を湛えている中禅寺湖がすばらしい。菅沼、丸沼等が夫々異つた水の色を見せている。三六〇度、ぐつとイカス眺めである。

彌陀ヶ池への降りは「落石注意」と書いてある悪路である。内心びくびくなのであるが前を女性が四道いになつて下つ行くので俺まで怖がる暇がない。「こんな所大丈夫だよ」なんて心にもないことをいつて励ます。程我もなく、先頭に二〇分位遅れて池に着いた。昼食の時でほとんど水筒の水

が切れてしまつたので、先に着いた連中は飲料に適さない微生物の浮いている池の水を飲んだそうだ。いずれも劣らぬ強胃の持主だから心配はないだろうが。

金精峠から湯元へ下る予定であつたが疲労と時間の都合で三人の若者だけが先に行き残り七人は手前の中曾根を下つた。

九月二日（水）　日中　晴　夜　小雨
六・〇〇起床　一〇・〇〇発湯元
一二・二〇発光徳キャンプ場

今日は光徳へテントを移す。刈込湖、切込湖を通つて行くはずであつたが、かなり荷が重いので案内書に三〇分で光徳へ抜けられると書いてあるコースを行くことにする。湯元の店の者に聞くと、険しい道で熊が出ることもある、とおどかされた。ともかくこの近道を進む。熊さんにはおめにかからなかつたが階段になつている所があつたり、大木が道をふさいでいてそれを乗り越えたり、道いずつて滑つたり、高低はそれ程ないのだが苦しい、休憩する為に歩いている様なものだ。

二時間かゝつてひつそり閉とした光徳キャンプ場へ着く。こゝの水道は断水だが、カマドはあり、薪まで貯えてある。いやな雲が流れて空が時々暗くなる。「台風接近かな」とちよつと心配する。

期待していた牛乳を飲んだが、市売の物と味、量は大差ない。一本二十円也だから商売繁盛だろう。

九月三日（木）　晴
五・三〇起床　八・〇〇発設営地
一一・〇〇着太郎山（昼食）
一四・〇〇発太郎山一六・五五着設営地
一九・〇〇キャンプファイヤー

明くれば快晴。木蔭のなだらかな道がしばらく続きガレ場に懸る。途中で振り返るとまだ弱い日ざしの下に戦場ヶ原が美しい。「太郎山頂（二三六八）の岩の根をほるとの本に書いてあるので面白半分にほつてみると二枚出てきたが税務所には内証であ

る。一二時四〇分に頂上を下る。しばらく進むと道がだんだんとわからなくなり、いつのまにかヤブの中に入つてしまう。何んとか歩くが少しづつしか降りれない。やつと見晴らしのきくガレ場に出たがどうやら降り道を間違えたらしい。まだ時間もあり、天候もよいので不安はないが雨でも降つていたら目も当てられないだろう。大事をとり頂上に戻ることにする。又ヤブこぎで木を分け、枝を分けて登り着いた所は先刻の太郎山である。一時間の準備体操をやつた様なものだ。これは掘り出した古銭の祟りだということになり、信仰深い我々はかわりに金二〇円也を埋める。(何時か行く機会があつたら掘り返してみて下さい)腹ごしらえをし、気を取り直してまた降りた。今度は堰堤に道をさえぎられてしまつたりしたがどうにか敵営地へ帰つた。今夜で山とも「さようなら」である。キャンプファイヤーを焚く。木が乾いているので非常に良く燃えるが、その割に歌の方がさえない。歌集にある歌はもう耳について大声を出す気にならない。それに初日以来気分的にしつくりしないものがあるせいだろうか。火のあつさを避けて寝ころがると無数の星と山の黒い影が美しい。静かに澄んだ夜空、これは山の魅力だと思う。

九月四日(金)　晴のち曇　小雨

七・〇〇起床　一二・二五発光徳

一四・一〇着日光　一四・四四発日光

一七・五〇着上野　全員無事解散

テントをたゝんで帰るのみ。ゆつくりと荷作りをする。

バスが中禅寺湖畔に着く頃からガスが出始める。湖の対岸が見えずまるで海の様に大きく見える。いろは坂で事故があつたとかでバス・ケーブルカー・電車と乗りついで日光駅へ着く。列車は青々とした水田の続く広い関東平野を薄汚れた煤煙の都へと進んで行くのである。

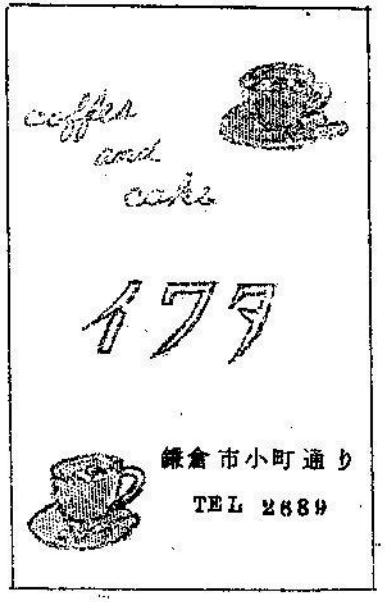
『あとがき』

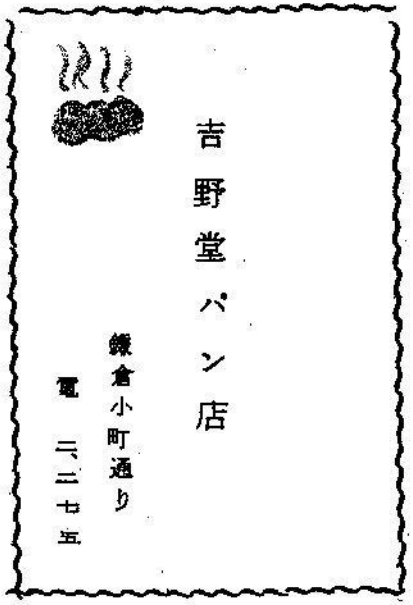
湯の湖でボートに乗つたり、晩めしに焼そばや五目ずし等を食べたりして、のんびりとした、俺には楽しい山旅であつた。

「部屋で歌つたり、冗談を言つたりして面白いけれど何にか表面的な附合いすぎる。もう少し内面的なものがあつてもよいのではないか」と女性から男性は文句を言われた。

難かしい事や面倒な事は互に好まないところであるが、真に楽しいサークル活動をするには、考えなくてはいけない問題である様に思える。

五九年九月記





美が原の思い出

6月27日	上野発	23.05
6月28日	大屈着	4.47
	巣栗着発	7.10
	白樺荘	9.15
	牛伏山	9.55
	山本小屋	10.10
	昼食	12.00
	王ガ頭	13.20
	茶臼山	15.00
	車道へ	16.15
	大出村	18.00
	大屈着	20.21
	大屈発	23.33
6月29日	上野着	4.55

そうだ〃打見たところでは
だが諸君がこの高原に
一度踏み入れたならば
その余りの見事さに心を奪われてしまうで

工二　米屋勝利

あろう。
そして諸君はつぶやく：：：
この様に美しい原があつたのかと〃
このさゝやきをそのまゝ名にしたのが美が原である。　深田久弥「山の幸」より
我々がこの美が原に足を踏み入れたのは山開きしてまもない六月二十八日であつた上野を二三時〇五分に出た列車は五時前やつと大屈についた。横浜の市電の様な松本電鉄にゆられて二十分、丸子町へ、ここで又バスにのりかえ〃となかなか大変。巣栗へついたのは七時十分。登山者二、三十名我々は三人のパーティである。トップをゆく気持よさを心に描きながら、ピッチを上げて出発した。しかし無念にも我がパーティは休み多い為、だんだん抜かれてゆき、は

ては女のパーティにまで抜かれる始末。あざみが我々をあざ笑つているかの様に得意然と咲いている。しかしまあこうなれば、日は長い。のんびりとゆこうぜ〃花を眺め鳥の声を耳にしながら、オツチラコ〃オツチラコ〃と登つていつた。白樺平着九時頃ここは誠に壮観である。つゝじの群落が道両側をおおい白々と続く白樺の純林の美しいいあらわしようもない。白樺小屋を過ぎると森林帯に入る。こつあたりバンガローがちらほら点在して居る。その森林が灌木に変ると、まもなく草原が現われる。その草花の咲き乱れる斜面を登りきると、ひよつこり美が原の一角牛伏山頂「美が原なつかしの丘」の道標が姿を現わした。ここから王が頭の二〇三四米を最高にして物見石山茶臼山、王が鼻、焼山等の二〇〇〇米を前後する山々が一八〇〇米の武石峠を低部として、東南から北西へ約十粁の大草原を展開している。到る所に馬、牛、羊が放牧され、まさに牧歌的風景に魅了されてしまう

山本小屋の上側の草原で昼食をたいた。馬がにおいをかぎつけてよつてくる。ポンチヨをシートにして、この広い草原で周囲の美景を眺めながら食べる飯のうまい事。のんびり休んで王が頭へ向つた。この草原をダベリ、歌いながら足を運ぶ気持よさ、涼しい風が快くほゝを撫でていつた。美が原の真中に「美しの塔」と称するコンクリート製の避難塔がある。
ここにつるしてある鐘は濃霧や吹雪の時鳴らす事になつていると云う。この塔には尾崎喜八氏の

登りつめて不意にひらけた眼前の風景
にしばらくは天井が抜けたかと思ふ：：：
の詩がきざまれている。この辺からだいぶ人が混んでくる。何しろ今では武石峠をへてバスが王が頭までくるのだから：：。王ガ頭にはテレビの中継所があり、老若男女多数の人が花見気分でやつてくる。野球する者、歌う者、杯をあおつている者、海抜二〇〇〇米とは思えぬ有様〃文明の利器は

老人、婦女子をまでこの高原で楽しませてくれるのはいいが、自然の美しさを破壊してゆく。ここでも何かしら不潔なものを感ぜずにはいられなかつた。この王が頭は山岳展望のすばらしい所というがあいにく今日は霧がかかつていて、その好景の栄に浴する事が出来なかつたのは誠に残念〃そこですぐに王が頭を後にして人並みをかきわけ？百曲り下山口を横に見て茶臼山へ向つた。人けも皆無で静かな気持のいい山ですが高山植物も荒されず、時得顔に咲き誇つている。この山頂に立つと王ガ鼻、王ガ頭、今歩いて来た美が原牛伏山と続く草原が、海原の如く広がり、その中に山本小屋のカマボコ屋根、王ガ頭山荘が小舟の如く浮んでいる。陵線には牛馬の群が点々としてこの広漠たる海原に波柱を立てている。東側はるか下方の山に真赤に広がつたつゝじの群落が見える。道らしきものもある様だ。むらむらと冒険欲がわいてくるのをおさえる事は出来なかつた。出発、道は無い駄目かなと思いながら進んでいつた。まもなく熊笹につゝまれたつゝじの群落に出た。赤いじゆうたんを敷いた様だ、相変らず道はない「どうするか」今更ひき返すわけにもゆかない。はるか向うに道は見えるが僕の前に道は無い。ふと見ると足元に動物の足跡がある。「かもしかではないかなあ」決定〃向うに見える車道目指して真一文字に下りていつた。うつそうと繁つた森林〃昼でも薄暗い谷間は足もうまる始末。全く近来人跡未踏の地である。少々気味悪い。互いに一抹の不安の念を心に抱きながら無言で山合を下つていつた。一時間下つてやつと道へ出た。地図を見ると扉峠から丸子へ通ずる道路である。「しめた〃バスがあるな」この広い道を三十分下つて停車場についた。時間表を見ると間もなくバスが来るらしい。うまいぞ〃と思いながら待つ事二十分、予定の時間十分経過、待てども待てどもバスは来ない。「仕方が無い途中で止めよう」。出発だ。二十分そこそこ歩いて

地方の人に会つた。このおじさん達二人は釣竿、かごをなげ出して横になつている。釣をしての帰りと見える。バスの話をすると、扉峠行は七月から運行との事、かごをのぞくとイワナが十数匹枕をならべて横たわつている〃三人ゲツソリ。しかし天は見捨てはしなかつた。「もうすぐトラツクが見えるからこの道を歩いてゆきなさい。あんた等をみつけたらとめますから。」この地方の人は山へトラツクで働きにゆくのだ。なにしろ四里も五里もあるのだから。三、四十分歩いた時、後方に砂けむりを飛ばしながら先程の二人をも拾ひ上げたトラツクが見えてきた。早速乗せてもらつた。箱の中はなごやかである。山の獲物がたんまり積まれた上に、田舎の健全に育つてきた青少年。健康色豊かな老若男女が楽しそうに語らい合つている。我々もしらずしらず仲間に加わつていつた。思わぬ所でロ－カルカラ！満点の気分に浴する事が出来た。村で彼等に礼をいつて別れた。皆んな手を振つて見送つてくれた。やつぱり田舎の人は人情が厚いなあ〃急に東北が恋しくなつて来た。その日の夜行で上野にかえつた。

文房具の御用は

豊文堂へ

横浜国立大学

経済学部坂下

丹沢登山　一年記

梅雨でありながらすばらしい快晴にめぐまれた六月十三・十四日（土・日）我々一年部員一行十三名は丹沢に登つた。

一年部員だけでの一泊山行は始めてであつたので、慎重に計画を立て食料、装備も何度も点検して手ぬかりのない様に務めた。おかげで、多少反省する点もあつたが、愉快になんの事故もなく無事に丹沢登山を終ることが出来た。

（参加人員）　十三名　リーダー　斎藤

金田　斎藤　白井　高橋　吉村　渡辺
甘粕　田中　平野　宮崎　諸節　山田
横手

（登山記録）

渋沢―丹沢山荘―一本松（昼食）―堀山
九、二七　一〇、三〇・四五　一二、一五・一三、一七　一三、四〇
――花立――塔ヶ岳――丹沢山（泊）
一四、三〇・一四、五四　一五、五〇・一六、〇〇　一七、一〇
丹沢山――蛭ヶ岳――原小屋（昼食）
八、二五　一〇、〇五・一〇、二〇　一一、一五・一三、〇〇
姫次――焼山分岐――鳥屋―本厚木（解散）
一三、一五　一四、一〇　一六、一五　一八、〇〇

渋沢から丹沢山頂まで

宮崎

丹沢山麓の道を我々一行十三人はゆつくり歩を運ぶ。すばらしい快晴である。六月の大倉尾根に青空が広がり、遠く雪をかぶつた富士の姿もみえ実に爽快である。なにしろ梅雨期とて晴天など考えもしなかつた事であるから前日カマボコ部室で雨の場合の事を懸命に相談したのが馬鹿々々しく思われた。一同例によつてひとしきり「一年生はツイている。」「日頃の心がけが違う」。大倉分岐より工事中の道路を通つてだらだらの登り道をしばらくいくと大倉部落、こゝで小休止の後、赤土の大倉尾根にとりつく。しばらくの間は表尾根の雄大な稜線に心を奪われ、脚下から緑の平野を蛇のように流れる水無川に感嘆の声をあげていたが、やがて真夏さながらの暑さと馬鹿尾根の登りにあごを出してしまう。一同の足も口も重くなり唯靴音のみ。一本松跡に到着したのは十二時過ぎ、とにかくも草の中に座り込んで昼食に喰いつく。

食後全員に荷物を分担して出発する。堀山のあたりから霧が漠々と深くなる。晴れていたら優美な富士の姿や、箱根の山群が手にとるように見られ、又夏の太陽に輝く太平洋が見られるはずなのに残念だつた。視界ゼロの中を花立に向い、馬の背と呼ばれるやせた尾根をすぎて馬鹿尾根にあきれはてた頃、第一の目的地塔ヶ岳についた。

頂上はいぜんとして視界はきかずその上風が強くひどく寒い。さすがの丹沢銀座四丁目も人かげはまばらであつた。我々は塔ヶ岳を早々に引きあげる事に決め尊仏小屋の裏手から静かな縦走路に入りひたすら丹沢山へ。

大倉尾根のうんざりするのぼりと比べてこの道は快適な縦走路で我々は夕風の涼しい静かな山を満喫した。

渋沢を出発して七時間半、ついに今日の目的地、丹沢山頂みやま荘に到着。雲の間

から西の空を色どる夕日、その中にくつきり、黒々と浮かんでいる蛸ケ岳などの景色に歓声を上げながら山小屋に入つた。

丹沢山頂

藷節

小屋で出された暖かいお茶が体内にジーンとしみこんで疲れを忘れさせるようだつた。我々一行の他にはわずかに三人居るだけ。

小休止の後、さつそく食事の準備にかゝる、飯は小屋で炊いてもらうことにした。米は全部出してしまい、荷物を二階に運び上げ、水を汲みに行くものと副食を作るものにわかれた。

水場はずつと下にあり、下りは十分ほどで着いてしまうが登りは坂道で水を汲み上げるのは大変だつた。

又一方では薪を集めてカレーを作る。ご飯ができたというのでもらつてくると、飯盒に軽く一杯で全然少ない、これでは足りそうにないので小屋に交渉して明日の分の米を返してもらい自分達で炊くことにした。

食事は山頂の草原で大ナベ一杯につくられたカレーを真中にして始つたが皆の食べることといつたら、初めこれだけのカレーが食べきれるだろうかと心配したのがおかしいくらい、みるみる皆のお腹の中へおさまつてしまつた。

食後すぐ明朝の飯をたき、その残り火に枝をくべてさゝやかながらキャンプファイヤーの如きものをした。さつきまで真赤にそまつていた空も紫となりやがて黒く変り今は星のきらめきがはつきり見え、たゞたき火に照しだされた皆の顔が印象的でありまつくらな木立の中、自然にとけ込んだ歌声が気持よく響いていつた。そして「一日の終り」のハミングを最後に山小屋のうす暗いランプの下へひき上げた。

山小屋の夜は眠れなかつた。別に寒くはないが、やはり家にいる時と気分が違うし下での話声も気になつた。がその内にいつのまにか眠りに落ちていつた。

山の朝は寒い。朝露で草が光つていた。小屋はいつの間にか満員、外にはテントもならんでいた。さつそく薪を集めて朝食の用意を始める。味噌汁がちつとも煮えないその間にも次から次へと他のパーティが丹沢を越えて行つた。

結局予定より一時間半ほどおくれてしまつたがみやま山荘を後に蛸ケ岳へ向つて出発した。

非常にゆつくりした朝食を終えて、出発したのは八時をとつくにすぎていた。

少し下つた所で、遭難碑を見る。以前の冬吹雪で小屋を前にしながら亡くなつた登山者の為のもの、と小屋の主人が話していたのを思い出す。

つるべ落しを文字通り落下してから、明るい草山を登り始める。霧のあい間から玄倉本流が以外に深い谷を現わしてくる。皆何ともいえない歓声をあげ、顔に喜がわく

そして玄倉川をまつすぐに見た雲の中から五合目附近まではつきり白い富士山が浮び出て一寸きどつてみせた。もう皆有頂天である。不動峠、横沢頭等の拠点もキョロキョロしていると忘れてしまいそうな存在だ

この間数パーティとすれちがう。中には一行プラス犬というのがあつて皆を笑わせるチョコチョコと中々の健脚である。

鬼ヶ岩の露岩で、そのアルペン的風景に縦走最大の喜びにひたる。深く屋根に切込んでいる熊木沢、玄倉本流と檜洞方面の尾根。一行の登行欲はいやでもわき上る。岩をなんなく下りきつて空への急坂にかゝるが鬼ケ岩の感激は皆を楽々とその頂上に持ちあげてしまつた。

蛸ケ岳頂上、雲がきれて、カツと日射しが強い。丹沢で一番高い所だが、不思議にもこれといつてうれしいような気がしない目に入る風景は鬼ケ岩やその前の尾根で感動したものばかりだつたためかもしれない

まあ頂上だというので十五分程休んで北に向う。

峠の下りは暗い林の中、ぐるぐると地の底まで下りてしまうような気がする。見通しがきかないのでしだいに単調な歩行になつてきた。むし暑さも加わつてくる。ぞろぞろと物も言わずに歩くことが続く。何の変化もない行進はやがて気分もだれさせるたゞ行程と時間に追われたように前の人の後にくつついていくのは、まことに退屈だ話すこともないので、暑さに文句をつけたり、昼食の場所などをもそもそ相談したりする。それでも原小屋の前でそれまでの見通しのきかないやぶ道からぬけだして明るい草原に入る。キャンプでもしたくなる所ほつとした顔ばかりだ。

昼食は原小屋の水場ですることに決める小屋から七分程で、谷の間の小広い河原というより、広間といつた感じ、日はまともにあたつている所であつたが、手頃な場所である。

紅茶等をわかして、だいぶゆつくりしたお昼である。パンの大箱はたちまち空つぽ単調な尾根歩きでは、だれも食べる事を考えるらしい。

のんびり腰を上げると、胃もおさまつたとみえて、スタスタと足どりが軽くなる。今度は姫次のきれいな草山があつたり、ガレが道にせまつたりでいくぶん変化のある尾根になる。歌も口から出てくる位歩くことにもなれてくる。姥山分岐には一気に行きつく。こゝから鳥屋まではポーツとする様な長い暑い道程、情性でもなければあくびが出る。おまけに西日が照りつけ風もなくというわけで列も乱れがちになる。高度が低くなつてきて、やれやれとしたら林道に入り、立派な道だが、遠回りさせられる鳥屋まではそれからあまり長くはない道だつた。バスの時間を気にして急いだのが馬鹿らしいくらい。

バスを待つ間、水をのんだり……して足をおもいきりのばして休む。

フツとねむくなつてくるようだつた。

かくして我々は大成功のうちに丹沢行を終えた。

まず第一に好天にめぐまれたこと。あの真白に雪をかぶつた富士。青空と見事なコントラストをえがく連山の波……悪天の丹沢縦走など思つただけでも味気ないものである。

第二に時間に十分な余裕をとつてあつたおかげで、はゞのある行動がとれたこと。これは随分気分的に楽であつた。

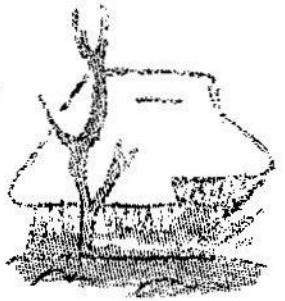
又、第一日目は少々まとまりが悪かつたが二日目は皆の気が合つてまとまつた行動が出来たことは今までの山行には見られなかつたことで気持がよかつた。

しかし反省すべき点もないではなく、食事に時間がかゝりすぎたことなどであるが一年生だけで始めてでもあつたので、やむえないことではなかつたかと思う。

その他わざと重い荷を背負つて行つたがやはり丹沢はサブリツク程度で登つた方がよいというのが皆の一致した意見であつた

とにかく全員の気がぴつたり合つて、天気にも幸され、事故も起さず帰れ、まつたくすばらしい山行であつた。

八幡平



参加人員（工二）
塚原仲一郎
米脇勝利
渡辺一郎
北上　靖（部外）
新行内雅博（部外）

このたび我々五人は東北の自然、風俗、習慣を求めて八幡平から津軽、男鹿半島と旅行を計画し、準備不完全でとるものもとりあえず、八月十七日夜行で出発、二十五日無事帰京した。ここに八幡平景観を紀行文にのせておしらせしよう。

八月十七日　晴（東京）八月十八日　晴
上野―好摩―大更―脇敷台―松尾鉱山―茶臼峠―凌雲荘（八幡沼）泊

台風七号の余波を受けて一日遅れはしたものの、八月十六日我々一行六人は、十九時十五分発青森行急行十和田に乗り込んだ車内に落着いた各人の顔にはやっとほっとした色が見え始めた。というのは部品であるテントの正確な所在が当日の朝まではつきりせず、米脇氏の大奮斗によつて、ようやく間に合つた次第、最初十二時四〇分の普通で行く予定であつたが、そのため夜行に変更、又買出しの連絡も悪く出発当日の午前から午後にかけて全く目の回る様な忙がしさであつた。さて汽車は一路北上、翌十七日五時三〇分盛岡市の北方好摩駅に到着。全く長い旅であつた。花輪線に乗り換え大更で下車、松尾鉱山鉄道で脇敷台へ。心配された天候も花巻りでどうやら持ちそうな様子に一同ほっとする。更にそこからバスで松尾鉱山（元山）へ、よくゆれるバスに閉口する。我々と同じ目的を持つた人達が約五〇人程居た。元山で登山者名簿に名前を書き込み、さあ目指す八幡平へ。約三時間半の行程との話に勇み立つ。約三〇分程で九時になり朝食。上を仰げばはるかかなた？に茶臼岳がそびえている。ちよつとげんなり、ワンゲル部員としてお恥かしい限りです。一同共荷物は大体今までにかついた内最重であるので足取りも非常に遅くこれでは六時間位かかるのではないかと思われた。四〇分かかつてようやく国鉄山の家もみやま山荘に到着。この頃には汗はびつしより、ここが頂上ならなどと気が弱くなり出す。ここ八幡平のコースには冬期のスキーヤーのために赤い円板に白字の番号を抜いた標柱がたくさん立つている。山荘のおやじさんの話によると元山から八幡平まで三〇〇番まであるそうだ。何とそこはまだ三四番〃先が思いやられます。いつまでここに居ても遅んでくれるわけでなし一同勇気を出して進む。大体二〇分程歩いて一〇分の休憩、道端にはききようが真盛りでわずかに旅心をなぐさめてくれる。下を向いたままの行程約二時間程で無人小屋の松風荘に到着昼食にする。この頃から天気は一段と下り坂、霧が一面に立ちこめていつこうに晴れず視界はほとんどきかなくなつて来た。せつかくの絶景も全然見る事が出来ずたゞ黙々と歩くだけ。そこから茶臼頂上まで一気に踏破。やがて雨が本降りになり出し、皆全身びつしより。一泊する予定の陵雲荘へ急ぐ。小生遅と前後しながら進んでいた別のパーティーの人に道を教えられ一斉に小屋に転がり込んだ。中に入つての話では今まで無人小屋であつたが、最近痛み方が激しくこのままおいておいたのではひどくなる一方なので今度村で管理することになり費用一人一五〇円づついたゞきますとの事。ここで又がつかり、つい三日前までは無料だつたとの事ついていません。あきらめて全員食事の用意に取りかかる。炊事の施設とて何もなく、水も下の八幡沼の汚れたのですます。全くひどいものでも熱くて猛烈に辛いカレーライスをフウフウ言いながら食べるうち皆の気持もおちつきあとは寝るだけ。明日こそは晴れてくれればと祈りながら一〇時眠りに就いた。

（塚原記）

八月十九日　晴（八幡平）

凌雲荘―八幡平―燕の湯―後生掛温泉―毛セン峠―焼山―後生掛銅泉―燕の湯（泊）

八幡平の朝は小鳥の囀に目を覚した。二重窓を通して部屋に入つてくる明るさは良天候を暗示してくれる様だつた。マットの上にゴザをしいた粗末な床だが疲れがぐつすり眠らせてくれた。顔を洗いに外へ出るとこれは以外〃深い霧に包まれていた。八幡沼の眺望も期待はずれに終つたかと思うと残念でたまらなかつた。朝食をとつているとヒユッテの七時をつげる鐘が響いてきた。その音は非常に暖かい人間の臭いがした。八時を知らせる鐘に送られて凌雲荘を出発した。相変らず霧は深く、八幡沼は足下に水辺だけを現わせ、殆んどは霧の中にかくれて、期待された美しい姿を私達の前に現わしてくれなかつた。沼にそつた山道を西に歩を進める。雑草と灌木の入り乱れた平野の中の路を十五分歩くと八幡平と刻まれた道標が立つている猫の額程の広場に出た。八幡平〃その昔八幡太郎義家がこの山に登つて北奥羽を見わたしたという伝説からこの名前が出たと云う。ここには展望台があつたが霧が少しも晴れず、まわりの木立が彷彿として薄青色に浮ぶだけあつた。が、却つてこういう八幡平の密知れなく奥深い景色にも大いに魅了されてしまつた。冷やかな空気に包まれ、広漠たる自然の真只中で身も心も何もかもとけ込んでしまう様に陶酔してしまつた。これより三十五分も歩くと幾らか路が開けて湿原帯に入つた。田代沼である。底が浅く種々の水生植物が水面から顔を出していた。その水辺には夏の湿原を我が物顔に振舞つていた白い天精水芭蕉も唯、大きな葉を残し、ありし日を忍ばせてくれるだけであつた。

十五分位休憩後出発、平坦な道を少しばかりゆくと下り勾配となる。道の両脇は高原のそれとは全く違つた針葉樹や広葉樹が高くそびえ立つている林となつていた。もう燕の湯も近い途上に大きな石が転つていたり、路の中まで木の根が伸びてきて歳れていたり、又路を横切つて木の根が這つていたり、一寸油断でもすると辷りそうなこの山路を気を使い乍ら一時間半も下ると標高は大変低くなり、いつの間にか空も快く晴れて入道雲が顔を出し積み雲が流れ、蝶やトンボの飛び交う姿も一際目に映つた。

よく繁つた木々の上からホテルの緑色の屋根が望め人里に辿り着いたも同然という安堵から大いに気を休めることが出来た。八幡平を縦走したことは、ある大きな山を征服したかの様に足取りも軽く温泉郷へと下る。道端の湿地から所構わず湯が吹き出していた。硫化水素の臭いもする。燕の湯部落についたのは十一時。パンとジュースとソーセージで軽く早昼を済ませた。ここの飲水は清水なので八幡平が沼の水だつた所為かとりわけ美味かつた。この水でつくつたジュースは勾うまでもなく私達の疲れを癒してくれた。十二時サブへ間食と雨具をつめ焼山ハイキングへと出発した。

先程来た道を二、三分引返してから右に折れ渓流の音を聞きながら出際を下つて行つた。蝶やトンボも楽しそうに遊んでいる。蝶蛇集の渡辺君商売道具の網を携えて来たので腕の見せ所と相成つた。まずは一振り二匹とその見事さ、二五分下つて後生掛温泉部落に着いた。ここは燕の湯よりひどく地面から湯が湧き出していてそのまわりの岩肌は黄土色で塗りつぶされていた。ここから毛セン峠までの登山道は何処にもありそうな山道で私達は身にこたえているあの重荷から解放されたのではしやぎながら登つた。八幡平の方を振りかへると茶臼岳をはじめ取巻く山々が青くくつきりとした横線を描いて聳えている姿はいつもながら美しいが、私達の歩いて来た所だけに一層親しみ深く感じた。一時間十五分の登りで毛セン峠に着いた。ガシコランのジュウタンが一面に敷きつめられている。涼しい軽やかな風が疲れて汗ばんだ体を何ともいえぬ程気持よくほぐしてくれる。正にこの世のパラダイスである。チーズで栄養をつけた

り、キャラメルをしやぶつたり、水を飲んだり十分程こころよさに浸り、重力と体力の限界にきている北山氏をそこにのこして焼山へ出かけた。三十分で焼山にたどりついた。今までの緑の世界は一変してここは白ちやけたごつごつした岩だらけの世界である。地獄の再現とでもいうか、まん中に大きな火口があり、濃い硫化水素ガスを含んだ蒸気が小さな岩穴から出てくる様子はほんとうに不気味である。そこらここらに黄色い硫黄のかたまりが、落ち散らばつている。無惨に破戒されたヒユッテが目につく。ここの風もほんとうに心良い。かけ足で火口を一周して鬼ケ城へたどりついた。ここにはあの地獄の事など何も知らないという様に、赤い花が岩間に咲き乱れているここからもうせん峠まで一気にかけて帰る

空気が冷たくなつたので五分休憩して帰途につく。下り道なので飛ぶ様に足が進む後生掛で晩の野菜、トマト、などを備えサイダーで軽く一杯を楽しむ。フケノ湯まではゆるい登り勾配であるが、帰り路で非常に疲れているせいか歩くのがいささかつらい。しかし部落に入つたとたん元気が出たテントは山陰の風の当らない好適な場所に張られた。

夕食がすむと、留守番の渡辺を残して風呂に出かけた。この温泉風呂にはたくさんの農村の湯治客が来ている。効病は忘れてしまつたが相当効果はあるらしい。明日は弘前へ出るので、近代人の身だしなみを忘れずヒゲをそつて顔の手入れをする。

今日で八幡平ともお別れだが、八幡平には山、温泉、高原、沼、湿原とすべての要素が集約され、それが原始性を帯びて混合しているところに大きな魅力を感じた。これまで歩いて来た道を心に浮かべながら明日の力を貯える為に早く床に就いた。

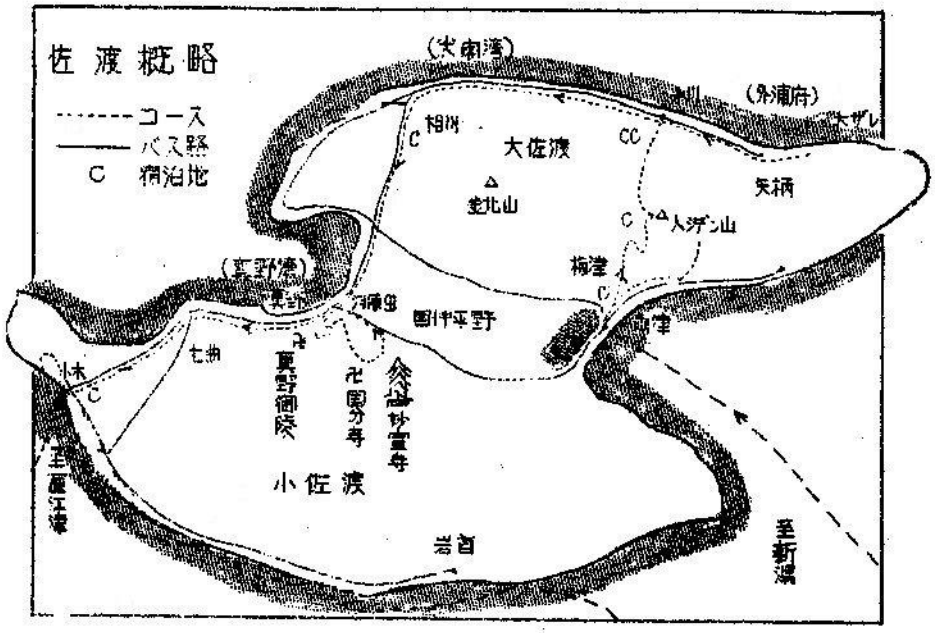
（新行内記）

佐渡

吉田光志　宮崎紘　佐藤滋
大沼洋彦　美馬宏三　永田克巳
怪原伸一郎　森山武　藤林徹

「島」日本で一番大きい島、世界的基準で見ると、島国の日本のその又島、チツポケなそして、日本の歴史に動かされ、絶えず変化して行く島。しかも数百万いや数十万の人間の心の故郷でありそれを自分で意識している島。一年間の資料捜しと、四回の手紙の連絡（その都度丁寧な返事をくれた）の後七月十日に発ちました。

二つの山脈に狭まれた大きな平野が一つそこを流れて年間年間二十万石の米の生産を助ける一つの川。両津を砂シの上に持つただ一つの湖。之だけが五万分の一の地図を四枚も占めている。山はけわしくないが海岸に落ち、至る所に海岸に注ぐ滝を見る事が出来る。そ[illegible]昔栄えた金山は今は見る影もないが、それで発達したこの島は、島内至る所に交通機関としてバスが使われ、港湾は大きくはないが新潟の外港として発達し、その為に唯一の湖、加茂湖を塩水に変えた。チントなかついで新潟美人と佐渡美人について騒騒を飛ばし、ドンデン山頂で雲海に沈む太陽に感激し、海府の美しさに目を見張り、千本部落の人々の人情に接して人間性をとり戻し、鉱山祭りの人波に呑まれて自分を忘れ、楽しい一週間の旅行を終えて来ました。



九日上野発　十日八時半新潟港発

十一時両津着、椿よりドンデン登頂を試みるも、雨とで引き返す。両津宿泊

十一日、六時起床　七時半発　九時梅津発電所着、十時ぶど平着　十一時二瀬川着

十一時半ゴボウ畠手前で昼食　四十分発

二時大滝山着　三十分二ノ段　五十分三ノ段　三時七分尻立山着　三時二十分ドンデン山着　五時夕食

十二日六時起床　八時半発　十時沢に出る。十二時昼食　一時半沢より出て鉱山跡に着く　二時四十分入川着

十三日大ガレの滝に行く、矢柄より二時間半で到着、バスを利用

十四日入川より相川に行く、お寺で泊る

十五日相川発お寺を巡つて小木に向う

十六日小木発新潟と直江津に二つに分れて行く。　以上

（記録で詳細を知り度い方は藤林まで御連絡下さい。）

上野から両洋まで

小雨の中を汽車は新潟駅にすべり込んだ新装をこらした新潟駅ですぐに新潟港行きのバス乗り場を捜した。見付けるのには易しかつたが、あいにくバスは混んでいて乗れない。大きい荷物を持つて乗込んでも車掌に「次のにお願い致します。」と言われるのが横の山である。仕方無く雨の中を次のバスを待つたがなかなか来ない。八時三十分発の船に乗るのに二十分になつても来ない。しびれを切らして車掌さんに伺いを立ててもはつきりした答がない。新潟美人について我論を唱えていた乙氏も次第に不安を顔に出し始めた。やつと来たバスに乗り込んで港に着いたのが三十分丁度。船は綱を外して今にも出そう。危険極まりないが全員飛び乗つて船上の人となつた。船は海面よりも低いと思える新潟工業地帯の川を通つて外海に出て行く。白と赤の燈台を出るとマイクロフオンから佐渡民謡が流れ始める。小雨の中で佐渡おけさを聞きながら船上の机にもたれている老人達、キャビンでは若い者連がトランプに興じている。我々は本土にしばしの別れと手を振つてデッキに全員勢揃い。前日夜行で上野を発つてから車中希望に寝られぬ一夜を過し、雨で出鼻をくじかれた型になつたが船上の佐渡オケサに聞きほれている様である。

やがて、向うに大きな陸が霧雨の中から突如現われ出た。皆をキヤビンから呼び出し、小雨の中に立ちながら、胸をふくらませながら、行く手に幸あらんことを願つた。それにしても最初に見た佐渡の印象は、あまりにも大きな島であり、果して、半周旅行が可能だろうかと思わずにはいられなかつた。

（藤　林）

雨と風

小雨の中を佐渡両津港に着いた。ついてない時はついてないもので梅津までのバスはその日運行日になつてなかつた。そこで椿までバス、椿からドンデンまで歩くこと

にしてバスに乗つた。観光案内所でも云つて居たが、バスの中でも瞰からの道はヒルの名所だとの事だつた。ちよつくらいやな感ずにもなつたが元気に棒を雨にもめげず出発した。途中小降りになつた時、立つたまゝで昼食をとつた。また降りそうになつたので早々に歩きだした。

やがて道は細くなり両側からの茂つた木の葉で見失いがちだつた。……「いたぞ〻」という先頭の声で足もとを見たらうんいるいる土の中から地上の畑りおこされたばかりのあの小さなミミズのような色をしたヒルがカタツムリの触角のようにユラリユラリと上を向いた先端を動かしているではないか、そうかと思うと一方では田でよく見かけるあのヒルのように体を縮めては伸ばし縮めては伸ばしこ我々の足もとに確実に近よるではないか、目でも持つているかのように間違いなく足もとに近よる。登れば登るほどヒルの数は増しついに足に吸いつかれてしまつた。ちきしよう〻とばかり足をとめ指先きでその追撃をとめようとしたが、指に吸いつかれてしまつた。ウフツ〻とやけどでもしたように手をふつた。ふつてもふつてもなかなかとれない。

持の悪さつてありやしない。どうにか指先のをふりおとしたと思つて安心したのも束の間、足には一匹二匹三匹……前にも横にも後にもヒルの大軍が登つてくる。止つていたのがいけなかつたのだ。棒をさがして使つた。皆んな、かがみこんで一生懸命だ。かわいそうになつた。でもがんばりたかつた。いつの間にか風も加わり雨は強烈になつていた。その自侵しているかのように音をたてるのがいやらしく、まだまだがんばりたかつた。それで沢のそばで休み、行くか引き返すかと議論した時も自信もつて行くことを主張した。しかしそれからしばらく行つた時、吉田さんの決断に従わざるを得なかつた。雨と風とヒルに完全に負けた。残念だが、九人のメンバーな

ので無理な主張にこだわることは出来なかつた。棒の店でハダカになつて被害を調べるとほとんど皆んなやられていた。おれは背中に吸いつかれていた。丸々とした奴が憎らしく、ふんでふんで気のすむまでふんだ。赤黒い血でその辺一面にそまつていたバスで両津まで引き返した。安い宿に泊つた。雨は更にひどくなりガラス窓にあたり散らしていた。もどつて良かつたかもしれないなアなんて思つた。（大沼）

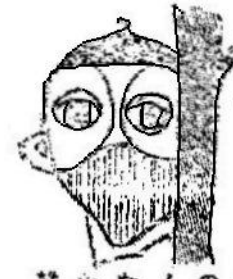
両津からドンデン山へ

前夜来の激しい風雨が朝方になつて止んだが、まだ雨雲が低く悲観的な空模様だ。八時、旅館を出発。蛭に吸われた永田君や美馬君の出血はとまつたようだ。大雨の後らしく、小石が水に洗われ涼しく光つている。右手は雨雲の低くたれた日本海。小舟の影さえ見えない。およそ、天気が悪くて色のさえない海ほど荒涼とした感じを与えるものはなかろう。道はわずかに登り。これから五キロ程は全くの田舎道である。途中で農家の婦人が声をかけてくれるが、意味が半分も通ぜぬまゝあいづちを打つておく。こゝの言葉は関西弁に似ているそうだが、あとで上高地で会つた島根大学の学生が同じような言葉使いをしているのを耳にした。バス運行は七月中旬まで梅津発電所まで週二回ある。佐渡弥彦国定公園の立札を見る。道の両側には炭焼き小屋が所々にあり、いつか多くなつた山々の中腹には小滝が数条白く見える。

梅津登山口から炭焼き道に踏み入つたが小屋の番人が案内をしてくれ本道へもどることができた。めいめいこゝでのアルバイトは相当こたえたようだつた。山道は展望が効かない。たゞ発電所から登山口迄の谷道をはさんで向い側に千米足らずの山々が見えるだけ。昼食も近くなると嶺間が見えて来た。天我に幸す〻昼食は小さな滝のそばでとる。ミルクパン、ソーセージ、ミカン罐詰。水がうまい。午后一時出発。しばら

くして視野が開けて向い側の山なみと我々の山との間の谷から湧き出るガスの間に小佐渡の海岸線を遠間見ることが出来る。

一面芝生におゝわれたタダラ峰を行く。石楠花の季節は過ぎたようだがまだ一株、二株と遅咲きのものがある。千頭以上の牛馬の放牧。ヘビ、クサギ、一面の芝生と石楠ッツジの群落。大佛山を登りつめるとすぐドンデン山。午后四時。えぐり取られた山肌のすそにヒユッテがある。この時また強い雨が小止みなく降つて来た。海から吹きあげる風は相当に強い。今夜はヒユッテに入る。ヒユッテのおやじも話がわかる人だ。遠来の客を心から迎えてくれた。いつもは新潟あたりからハイカーが来るだけだそうだ。



夕食は両津で購入した魚の干物とさつま汁。おふくろの味はしないがなかなかうまい。翌日の詳細な行程をたて九時半就寝。

就寝からイデオロギーの問題へと話題が転向した。T、O、M君等盛んに現在の資本主義のシステムを是とし君らはその崩壊の歴史的必然性を強調するT君は、現在の社会においてたゞ優秀な技術をマスターし生産をあげることを主張し学生運動を見ると恥ずかしくなるとまで語る。しかしその気持は何から生ずるのかT君らにはわからなかつたようだ。人間としての価値を考えることに求めるY君は「数学の問題や製図の問題を解くのは考えることではない。それは週刊誌のパズルのような問題と同じで、簡単に答えの求まる問題などは考えるに値しない。答の出ない問題を考えなければならない。そこで対象の一つとして社会という問題が生じて来るわけです。学生運動などに参加するものは多くが自己の目的意志にもとずいた判断力をもつて行動しているのであつて、何ら人間としての本質を欠いたものではない。」と弁解していゝました。社会主義のシステムをたゝえて口角泡を飛ばしていたN君も一年生ら

しく静かになつたようです。それではおやすみ。

ドンデン山より入川まで

（吉田）

馬小屋で目覚めると、東の空は赤く、西の空は青色だ。今日は晴なのだ。すでに起きた連中は、朝焼に感嘆の声を上げている外は清々しい涼しさだ。なぶるかな曲線の芝生を足がひとりでにその見えぬ方へ向く海は全くなめらかだ。水面の小船が波の三角の頂点だ。「国仲平野の中で海にへばりつく加茂湖は天の橋立だ。」と両津の宿のおじさんが言つたのはまさにその通りである。両津の町も、ドンデン山の芝生の上でモサモサ草を食う馬も未だ寝ぼけまなこだ濃木の繁みに潜り込むとおや、目の前に蛇が枝にとぐろをまいて寝ている。どきりとしたが起きぬ様にそつと立つて逃げた。

さようなら、さようならとヒユッテのおじさんはいつまでも手を振つてくれる。入川への下り道、緑の中にポツンとしやくなげも咲き残り、あじさいは水々しい。

入川への道に入川沿いだ。例のヒルが又いそそうだ。心配だ。雨で水が増しているのか向岸へ渡れない。石を投げて飛び石を作る。渡つたと思うとヒル地帯。知らない内にセルパンシューズの上で尺とり運動をやつている。必死の気持で蛭と靴下に塩をまぶす。黒いユニフォームの上皆大パーティが女性も交えて岩の上で一休み。入川から登つたらしい。

さあ、今度はロープで向う岸へ。ちよつとした探険気分だ。川の両岸は山がそびえ無人の谷を行く国大探険隊。さて今度は慎重に岸壁にしがみついて。途中で砂利取りの女労働者が若い顔に白い手ぬぐいをして働いてるのに会う。廃道路に出た。かつての金鉱に影さえ見難く、鉱滓口は青い木の繁みに姿を埋めている。

足が痛くなつて来た。吉田さんの足は靴ずれでかかとがふつかにむけている。山又山の道を進む。

見えた！海だ。すばらしい青の美しさ。

ぎらぎらと太陽に、道の白さ、田の緑、海と空の青が美しいコントラスト。静かな、冷たさを感じさせる北の海。

バラバラ家が散在する。通りかかつた中年の農婦にキャンプに適した所を聞いた。特徴ある言葉。佐渡へ米ているのだ。近所に良い場所があると言うので勇んで行く。素晴らしいキャンプ地だ芝生が海辺から広がり、波打ち際はマッターホルンの如き奇岩がそびえている。

村の人は今日はこの広場で漁の網作りだ皆親切に歓迎してくれる。テントを張つて海へ入る。すばらしいすき通つた海水だ。

夕食作りも村の人達は見に来る。のんびりした所だ。風呂も提供して呉れる。本当に親切な、平和な村だ。生活も楽で泥棒もいないと言う。マッターホルンからのいか釣り船は怪しく美しい。近所の家に風呂をもらいに行つて帰つて来る。美しい娘さんに背中を流してもらつたとうれしそう。森山さんは鼻血を出してしまつた。青春万才〼　おやすみ。　（永　田）

七月十三日　入崎から大垂の滝

起床五時半、朝食の後、　入崎九時五分発→矢柄を経て、関に着く。五十浦から岩谷口に出て、跳坂まで。昼食の後に、大垂の滝を見物し寒戸崎に着く。矢柄→入崎

昨夜風呂に入らせてもらつた家の老人の話「外海府真更川の上流の山中に、山居のお池〟と呼ばれる神秘な池がある。昔池の辺りの桜の老木の洞窟に浄厳という徳の高い坊さんがいた。或る夜一人の若い女が戸をたゝいて「私は此池にすむ夫婦蛇の雌でございますが、只今産熱のため大変苦しんでいます、どうか御上人様の功徳でお助け下さい」と嘆願した。そこで浄厳は六字の名号を授け一心に祈願した甲斐あつて雌蛇は

苦しみからのがれ其夜の暴風で天に昇つた後に残つた雄蛇はひどく悲しんで方々雌蛇を探してまわつたが大垂の滝までやつて来て滝の上から尻尾が崖の上の松の木にからませて滝をのぞいた時その松が折れて雄蛇は滝壺に落ち滝に打たれて死んだ」とその老人は大垂の滝にまつわる伝説を話してくれながら、外海府の海岸を見物に行くのならば大垂の滝を見なければといつたロぶりだつた、そんな訳で朝食を済ませある丈の携帯食品と水筒を用意してバスで入崎を出発する。終点矢柄でバスを降り、帰えりのバスの都合もあるので前進は十二時迄として滝を最終目標に道を急ぐ

関部落の一軒の店で十三倍になるという蒲鉾ジュースとミカンの罐詰を買う。坂の上で予定の十二時になつたので前進をあきらめ昼食にする。こゝからの日本海の眺望は又格別で向うに朝鮮あるいはソ連が見える様な気がする。丁度そこへ土地の人が来合わせ滝へ降りる道を教えてもらい二〇分後には海岸から四五〇米も落下する大垂滝を眺めていた、それから近くの浸蝕された洞穴を見物して帰途につく。　（宮　崎）

灰色がかつた白い空が海を一層青黒くしている。こんなに朝早くもう子供達がやつてくる。夕べのキャンプファイヤーや歌やお菓子、我々だつて忘れやしない。カバンをもつてかたまつている子供達の顔々にはこの空のような曇りの色が浮んでいる。遠くからたゞ黙つてじつと我々がテントを片付けているのを見ている。

ゆつくり朝食をとり十一時にバスに乗る走り出して間もなく、左側にある一軒の農家の窓から体をのり出すようにして手を振つているおばさんを見つけた。あわてた我々も夢中で見えなくなるまで帽子を振つた。もし、見過していたら、二晩のお風呂もそれ程深い思い出とはならなかつたろう。

道は悪く窓の外に見える水平線が右左に傾く。途中乗り合わせた人から教わり、

子王が母とめぐり会つた所なる小さな小屋を見つける。鐘乳洞を思わせるくり抜いたままの狭いトンネルをひどくゆれながらバスは通る。ちようど尖閣湾のこつちにあたるのであろう、そのキリ立つた岩や岸壁や鳥の姿が想像される。

十二時四十分小雨の降る相川町に着く。昼食を済ませてから、一晩泊めてくれそうなお寺を捜したあの頼りなさ。さいわいすぐ見つかつた。町の通りを少し入つた所に門があり、その右手が鶏小屋で左手には小さいどみごみした畑のあるうすぎたならしいお寺である。

雨が降つているとは言え、この相川町はいま鉱山祭りなのですこしく賑やかである十二三人が一団となつて、揃いのハデな着物にうちわをつけて、シャミセンのおけさに合わせて踊り歩く姿はなどやかで楽しそう。この町も昔遊の田舎町と大差はないがただおみやげ屋と旅館が目立つ。

夜になつて九時頃、少しみだれた足取りで我々がお寺に帰ると奥の方から陽気な歌声が聞えてくる。こうなつちゃーちよつとねむれんのが俺達である。そこで話のわかるのが奥さん、奥に呼ばれ、丸い御膳の上にコツプが並ぶ。和尚さんと奥さん、それにしんやのおじさんなる人と我々、グツト景気がつく、

「あー佐渡へ佐渡へと草木もなびくよ佐渡は居良いか住み良いか」

まつたく奥さんはいい声でうまい。

「聞いてばかりいないで今度はそつちでも歌いなさいよ。」

「デカンショ、デカンショで半年暮らすヨイヨイ。」と藤林氏が皆んなの拍子に合せて歌いはじめる。我々もせつかく佐渡まで来たのだから「佐渡おけさ」位は憶えて帰りたいという。

おだてられて悪い感じのしないのが人情、奥さん盛んに声をはり上げてくれる。むずかしくてなかなか憶えられない。今度はおけさ踊りが見たいというと、しんやのおじ

さん、ハゲた頭まで真赤にして手足を動かすがうまく歌にあわない。酔もだいぶまわり、皆んなの気が大きくなる。おとなしい和尚さんをつかまえて、奥さん盛んにハゲ頭をなでている。と思うと、

「あたしこんな人きらい。」

とくる。気分は悪くない。このなどやかさの中にひやかしを入れると、

「あなたたち、こんなお寺に泊つたりしてどうせアルバイトでもして学校に行つてるんでしよう。ちやーんとわかつてるんだから。」

とやられる。又、

「わたしたちは十一月になつたら東京に行つて今度はうんとお世話になるから。」

と皆んなにサインを求める。

時もいつの間にか十一時を過ぎ、最後に我々全員で雪山讃歌を歌つた。その時は、和尚さんをはじめ、奥さんもしんやのおじさんもみんな静かに聞いて下さり、心から我々を歓迎し理解して下さつた。(美　馬)

お寺めぐり

吉田氏一行と別れを惜しんだ我々六人はバスを新町で降り、昼間の一時をお寺めぐりとしやれこんだ。停留所に荷物をあずけ身軽となりまず真野御陵へと向う。この真野御陵とは承久の乱に北条義時のため、佐渡に配流なされた順徳天皇が、ここで御火葬なされたのを治定したものであるそうな入口には五十がらみのオツサンがおり、その頭が堅いこと。正面に後を見せての記念撮影はまかりならぬとの仰せ。ハイハイ：早々にここを引上げ近くの展望台へ。ただのお茶をたくさんいただく。ここで又、あの美しいガイドさんと出合う。一同ただニヤニヤ。こんな所にいつまでもぐずぐずしていてもしようがない？とさて出口と書いてある階段を降りて行くと、なんと下がおみやげ売場。たくましき商魂にいささかげつそり。そこから次の目的地国分寺へ行くため元の停留所へと引返す。途中真野宮で

記念撮影。勇ましい軍隊行進曲の音頃に合せて一同足取りも軽い。停留所で昼食をサブに入れ国分寺へ。

この国分寺というのは天平十三年聖武天皇の詔により建立された佐渡国分僧寺まで佐渡最古のものである。国宝にも指定されており静かな落着いた寺である。そこの庭で昼食、そのうまかつた事〃約一時間の休憩の後、目指す最後の寺妙宣寺へと向つた。約十五分程で到着、法隆寺の五重塔にも劣らぬ立派な塔が、人気のない林の中にそびえていた。この五重の塔は新潟県下唯一のものだそうである。早速ここでも記念撮影、相も変らぬ面々がすましこむひとときこれでお寺見物も終り、帰りの道行の早かつたこと、行きの三分の二というところ。お寺見物に要した時間は四時間程であつた。二時二五分発の小木行のバスに乗る。約一時間半の行程、途中七曲りの急所で肝を冷しながら一路小木へ。一時間程すると皆船こぎが始まる。小生晩のおかずが気にかかる。やがてバスは日本海の反射する強烈な西日を受けながら、佐渡南端の港町小木へとすべり込んだ（塚原）

小木より新潟まで

七月十六日八時船にて小木をたつ。短い滞在であつたが佐渡おけさ、島の人情、無邪気な子供達からして佐渡の風情を満喫させてくれた小木であつた。宮崎、塚原は両遊券の都合上後に残る事になり、しばしの別れであるがやはり歯の抜けたようなお互の気持だ、船着場で二人が持つ七本のテープも一本々々と切れ、風になびいているのは、佐渡との縁が一つ一つたち切られ名残惜しそうに島の方へ手をさしのべている誰かの気持のようだ。小雨が降りだし、見送の人も霧の中にかすんで消え、船は佐渡の西海岸を南下し一度帰港したがやがて完全に佐渡を離れた。小雨の為島の海岸線あたりのみしか見えず、それも段々霧雨につつまれていく様子を見ると、兼好の云つた「月は隅なきをも見るものかな」といつた心持が察せられた次第である。

佐渡へ佐渡へと草木もなびく
佐渡は居よいか住みよいか

皆船室に寝ころび急に黙り込ゝでしまつた勿論、家へ帰れるという望郷の念とはんの今さつきまで味つた佐渡の思い出とがごつちゃになつたのであろうが、雨とヒルに悩まされた第一日の翌日のドンデン山の長々とした芝生のスロープ。牛や馬の群の平和な情景、千本の村人達の好意に満ちた目、無邪気な子供達の笑声、キャンプファイヤーを囲んでの合唱、絶景、奇景の数々、相川のささえおばさん達と過した馬鹿さわぎ思い出せば切りはないが、皆の心の中「おれは必ず又佐渡へ行くぞ。」と思わなかつた奴がいただろうか、その機会もほとんどないとは知りながら誰かがこんな歌を歌つていた。

山の緑　かげらせて
雲は暗く　たなびき
風も迷う　別れ路に
立ちて　涙あふれぬ
花は白く　うなだれて
海も嘆く　今日の日
別れ惜しむ　言の葉も
絶えて　涙に手を取る
なつかしの佐渡の乙女よ
別れの悲い残して
また会う日まで

（森　山）

編集後記

○編集を始めた時はまだまだ残暑がきびしかつたのに、相継く台風と共に涼しくなつて、厚い上着が恋しくなつてしまつた。

○今度の編集はもう少し編集部に主体性をもたせようと意気込んで、特集記事などを各部員が担当した。又原稿が多く、一号の二倍にもなつたので、皆張切つて、ケンケンガクガクの議論が編集のことかつワンゲル理論まで及んだりした。

更に又後継者たる二年生が主となつて、編集に当つたことも一つこの編集の特色で、これなら後顧なくバトンを渡せるという見込が編集に関しては十分ついた。

○今号から、山岳気象講座を掲載する予定であり、理科大の気象部と交渉の結果全面的な協力を得たが、都合で次号よりとなつたことをお許し願いたい。

○今後も本誌を増々充実したものにし、たこ足大学の宿命たる学部間の疎遠さを柔らげる為のきずなとして活躍する様にしなくてはならない。

○十月某日。締切り一日前、トラックやバスが数台連ねて工学部の校庭に入つて来た丁度昼食に実験室から出て来たT氏、それが或る映画会社のロケ隊だと知ると自慢顔に部室に飛び込んで来て、丁度編集にあきてきた部員に知らせたから大変、それつとばかり飛び出した。編集が滞ること一時間。F氏が一人でブンブン恐つていた。……

後日談

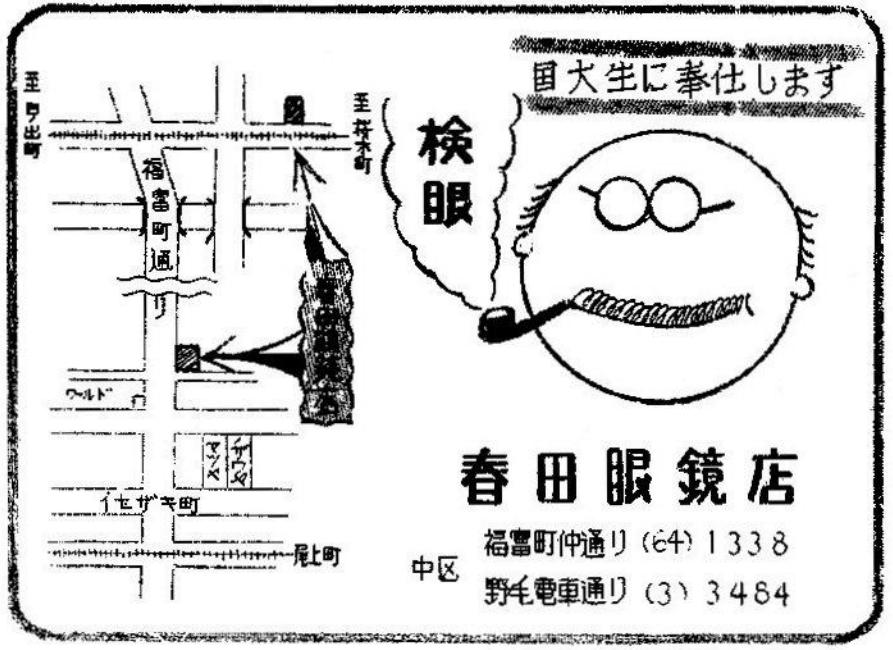
ところが一番始めにその映画を見にいつたがF氏だつたとは、はてさて……

○今年の一年部員は元気のよいのが揃つている。試験週間だというのに広い運動場で男女一緒にバレーボールやキャッチボールをしているのはここだけである。他のサークルにグッと差をつけたつもり。

○工学部にも部室が出来、経済も立野の一年生を迎へて活潑な動きを始めているにも拘らず、学芸にはまだ部室もなく部員は廊下で笑みをかわす程度である。今の学芸の不活潑も、大いにこれに関係があり、部復得が現在第一の課題

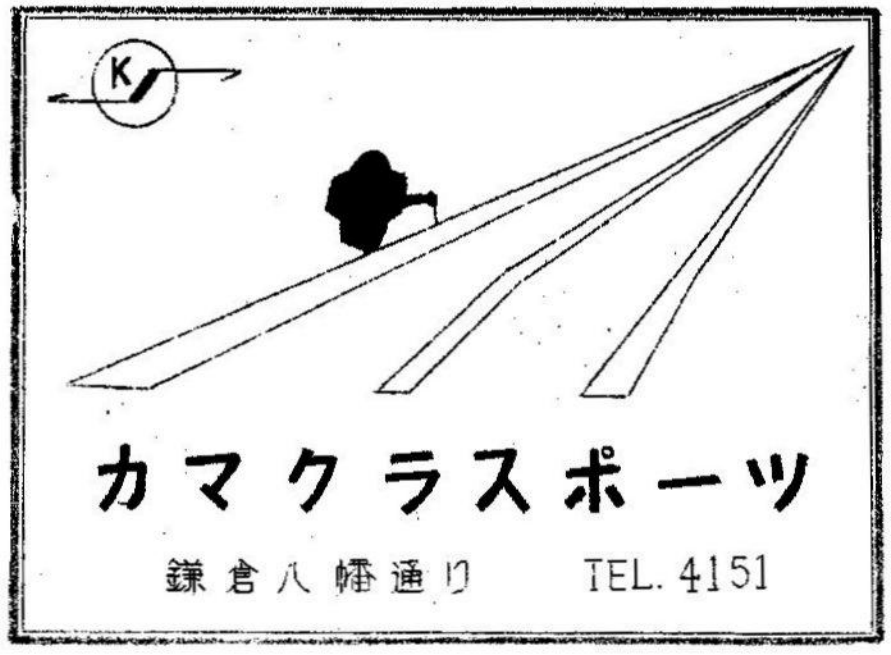
なお、編集にあたつて、積極的に御協力下さつた方、校正の煩貴重なる時間をさいてえんえん五時間近くもよろこんで細かい字にとり組んで下さつた田中康子さん、鍋柄栄子さんに心から感謝の意を表すと共に今後一層の御協力を部員の方々にお願いする次第です。

尚カットの多くは、工学部F君の御協力を得ました。



登山に・ハイキングに……新しい時代の新しい味！
極洋印
極洋の ゴールドミート
Y35.
↑最高級の焼肉
↓美味しい佃煮
極洋の キングミート
Y40.
新発売！
↓コーンビーフに代る
クレハロンの優秀性・シールの完全と充分なる設備があいまって、保存期間が長く数ヶ月間は保証されております。したがって登山やハイキングに携帯に便であり好適の食品です。しかも、価格が低廉であり、そのままでも旨めて美味ですし、調理して御惣菜とするなど、必ず御満足して戴けるものと自信をもっておすすめ致します。
Y50.
東京 極洋捕鯨 丸の内

月賦の店
日本信販加盟店
ショップサービス加盟店
株式会社
レッサンカメラ商会
横浜市中区伊勢佐木町
松屋デパート前


K
カマクラスポーツ
鎌倉八幡通り TEL. 4151